教育に新聞を
Newspaper in Education

2022(令和4)年度

鳥取県
NIE実践報告書

鳥取県NIE推進協議会

目次

● 巻頭言「ＮＩＥは新聞界と教育界をつなぐ貴重な接点」…… 1
鳥取県ＮＩＥ推進協議会長（米子工業高等専門学校　教授）　加藤　博和
● ２０２２年度鳥取県ＮＩＥ実践指定校の報告
① 会見小学校の取り組み …… 2
南部町立会見小学校　教諭　勝部　陽子
② 学びを深めるＮＩＥ　～紙面と画面の往還の中で～ …… 13
鳥取市立桜ヶ丘中学校　教諭　平尾　尚子
③ 湯梨浜学園の取り組み …… 27
湯梨浜学園中学校・高等学校　教諭　大西　圭
④ 鳥取西高等学校の取り組み　～社会に拓かれたＮＩＥを目指して～ …… 32
鳥取県立鳥取西高等学校　教諭　中野　美紀

● 第２７回ＮＩＥ全国大会・宮崎大会 概要 …… 43

● 第２７回ＮＩＥ全国大会・宮崎大会に参加して …… 47
※所属・肩書は 2022 年度当時
気軽に楽しく活用を
鳥取県ＮＩＥ推進協議会アドバイザー　岩井　克之
心に残った授業風景
南部町立会見小学校　教諭　遠藤　卓
大切なのは「継続」
鳥取市立桜ヶ丘中学校　教諭　徳永　絵里
手に取るきっかけに
湯梨浜学園中学校・高等学校　教諭　倉恒　敬介
豊かな学びへと結実
鳥取県立鳥取西高等学校　教諭　中野　美紀
● 鳥取県ＮＩＥ推進協議会　会則 …… 50
●「出前授業」募集のご案内 …… 52

ＮＩＥは新聞界と教育界をつなぐ貴重な接点

鳥取県ＮＩＥ推進協議会長
加藤　博和　（米子工業高等専門学校　教授）

今年度も実践指定校の成果をまとめた報告書が発行されることに敬意を表したい。

教職員不足の深刻化が報道される中、現場では何とかやり繰りしながら学校運営や教育活動を行っておられると推察する。そうした状況にあって、実践指定校となって年間にわたり児童・生徒に新聞を活用した授業や教育実践を通じて確かな学力を保障し、豊かな人間性を育成されるとともに、私たちＮＩＥ関係者にその取り組みの成果や課題を提供・共有していただいたことに感謝申し上げる。

この巻頭言を書いている時点で各実践校の原稿を拝見していないが、昨年度の総会から、各校の発表後に質疑応答の時間を設け、行間にあるＮＩＥの実相にも触れる機会となっている。今年度もこの報告書を読みながら、各校の発表を聞き、充実した実践報告と出合い、交流できることを楽しみにしたい。

願わくは、実践報告書や総会でのやり取りなどが、過去の蓄積も含めて、当ＮＩＥ協議会としてホームページなどで発信され、先生方や関係者、児童生徒の保護者、市民一般にも伝わるとありがたいと思う。

教職員不足が社会問題になり、その確保のための待遇改善などの方策が検討されたり、採用要件が緩和されたりしているが、先生方にとってはワークライフバランスや子どもたちと向き合ったり教材研究をしたりする時間の確保などが求められているかもしれない。長時間労働や多忙化の中で、ＮＩＥに取り組みたいと思っておられても、なかなかそこまで余裕がないという実態があるとすれば、そこのところの改善が必要であり、現場の実態やニーズを把握することもＮＩＥの推進にとって重要ではないかと考える。

取り組みやすいＮＩＥの紹介やサポート、そのコーディネートやマッチング、ＮＩＥの成果のデータベース化、実践校からの横展開など現場とＮＩＥをつなぐ努力や工夫が必要である。

学校には、さまざまな分野からの教育要請が来る。私がかかわっているものでも、消費者教育・金融教育・主権者教育などがある。県の担当部署からそれぞれ作成された小冊子などが学校に送られてくるが、どのように活用されているか。ＮＩＥもしかり。こうした社会からの要請をＮＩＥが取り込んで、〝新聞×〇〇教育〟という形でＮＩＥと連携して取り組めると現場に受け入れやすくならないだろうか。

また、教職員の年齢構成も若手の先生方が増えてくると、いわゆるＺ世代で、紙の新聞にあまりなじみがなく、〝ＮＩＥ？〟となってしまっているかもしれない。そうした先生方に新聞を気軽に読める環境を提供してみてはどうか。

改めて、ＮＩＥの意義や目的、有効性、楽しさなどをいろいろな機会を通じて普及･浸透を図っていくことは私たちの取り組み課題の一つであろう。

私自身、新聞自体を紙で読むよりも、インターネットのサイトや、検索サイトのトップページで記事を読むことの方が増えたように思う。その長短は議論があろうが､教育界もＤＸが（コロナ禍で）進んだ。ＮＩＥもデジタル時代に対応する形が模索されよう。

ＮＩＥは新聞界と教育界をつなぐ貴重な接点であり、民主主義社会を形成する運動・共同作業ともいえよう。相互理解を図りながら社会における新聞の役割に思いをはせ、新聞で学ぶ教育の深化と創造に引き続き皆さんとともに取り組んでいきたい。

会見小学校の取り組み

南部町立会見小学校　勝部　陽子

１　はじめに

本校は、昨年に引き続きＮＩＥ実践指定校となり、２年目の実践に取り組んできた。１年目はまずは新聞に親しみを持ち、身近な存在として感じられることを目標とし、その成果は得られてきたように思う。今年度は、引き続き新聞を身近なものとして感じられるよう様々な学習や学習環境に新聞を取り入れていくことに加え、たくさんの情報から必要なものを「読み取る力」や、思いを文章化して伝える「表現力」を養っていくことを目標に取り組んだ。

２　実践内容

（１）各学年の取り組み

①１年生

生活科の学習で、節分の日に「２年生に向けて、やっつけたい○○おにをたいじしよう！」と新聞紙を豆まきの代わりに丸めて、自分の中の「鬼退治」をして楽しんだ。自分で描いた「わすれんぼおに」「おこりんぼおに」「はずかしがりやおに」など自分の苦手なことや弱い部分をやっつけて２年生にむけてがんばるぞという気持ちをこめて、新聞紙を丸めては「鬼は外！」と一生懸命に投げていた。

②２年生

図工「しんぶんしとなかよし」の学習で、新聞紙をくしゃくしゃにしたり、まるめたり、つなげたり、やぶったりしながら発想をどんどん広げていく制作活動をした。児童は、新聞をくっつけて大きくしたり、くるくる丸めて長い棒にしたり、体にかぶせて服や布団のようにしてみたり、新聞を使って色々な物を作り、とても生き生きと楽しみながら活動をしていた。

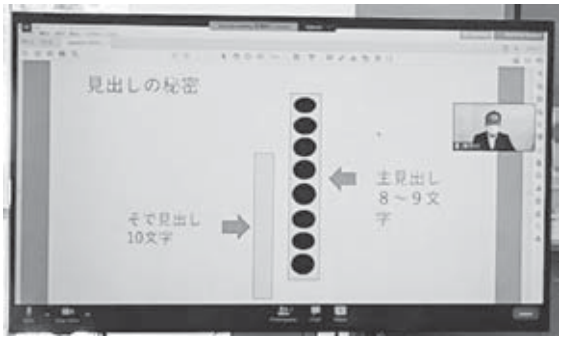
生活科では、町探検のまとめとして新聞作りをした。初めての新聞作りだったが、町内の施設を訪問して調べたことや分かったことをチームで協力してまとめ、大きな模造紙を利用して新聞を作った。１学期と２学期に作成し、１回目は校内の児童に、２回目は町内の人に読んでもらえるように読み手を意識して作成するとともに、２回目はパワーアップさせていこうと意欲的に取り組んだ。「ぱっと目を引くようにするために、カラフルにしよう！」「絵を入れるとわかりやすいかな？」と考えながら工夫して作成をすることができた。

③３年生

社会科の学習で､スーパーに社会科見学に行き､学んだことを｢社会科見学新聞｣にまとめた。児童は、スーパーを見学して驚いた発見や店長さんにインタビューをしたことなどを項目別にまとめたり、クイズにしたり、４こまマンガにしたりして、わかりやすく記事を書くことができた。また、出来上がった新聞を保護者にも見てもらえるよう、通信に記載してあるＱＲコードを読み取ると、児童の書いた新聞が閲覧できるサイトを作成しいつでも閲覧できるようにした。

④４年生

国語科「みんなで新聞を作ろう」の学習で、鳥取市にある新日本新聞社とオンラインでつながり、新聞にまとめる中ででてきた疑問や困りごとを、新聞記者の方に画面越しに相談をし、アドバイスをもらうことができた。児童から、記事の選び方、見出しのつけ方などについて質問をしたり、読者を引きつけるための見出しや記事の選び方のこつ、写真と本文との関係など、プロからのアドバイスをもらったりした。児童も「なるほど！そういうことか！」とつぶやきながら一生懸命にメモをとり、耳を傾けていた。新聞記者の方から学んだことを自分の新聞作りに生かすことができた。



⑤５年生

国語科「新聞記事を読み比べる」の学習で、新日本海新聞社の方による出前授業を予定し、新聞や紙面についての児童からの質問を事前にお伝えした。出前授業当日、校内でコロナ感染拡大の懸念があり、残念ながら急きょ中止せざるを得なくなってしまったが、出前授業でお話ししていただく予定だった資料と質問への回答をいただいた。「なぜ１面はカラーなのか。

どのような意味があるのか」「書くことはどのように決めているのか」「記事を書いた後はどのような流れで新聞になるのか」「新聞をつくるときにどのような工夫をしているのか」などたくさんの質問に回答いただき、学習の参考にさせていただいた。児童は学習を通して、新聞の仕組みや２社の記事を読み比べて、情報を出す側の意図を読み取ることの大切さについて考えることができた。

また朝新聞を実施した日には、その日の日本海新聞のコラム欄をコピーし、５年生には難しい言葉の意味だけをピックアップして読みやすいようにしたものを全児童に配布し、じっくりと読むことができた。

⑥６年生

朝読書の時間に毎月２回、全員で当日の日本海新聞を読み、自分の気に入った記事を切り取ってワークシートに貼り、記事の内容を要約してまとめて感想を書くことを継続して行った。始めは記事を切り取って感想を書くことはできても要約が難しい児童が数名いたが、回数を重ねるごとに少しずつ書いてあることの要点を見つけることができるようになり、３学期には全員が要点をまとめて書くことができるようになった。

また修学旅行の際に、鳥取市の新日本海新聞社の見学をさせていただいた。新聞記事を作っている様子を見させてもらったり、新聞ができるまでの過程など質問をしたりすることがで

きた。帰るまでに自分たちが新日本海新聞社を訪問したことを記事にした「見学記念新聞」を即座に作っていただき、児童もとても驚き、喜んでいた。

（２）校内での取り組み

①朝新聞ＤＡＹ

昨年度に引き続き、毎月第２・４金曜日を「朝新聞ＤＡＹ」とし、全校で朝読書の時間に新聞を読む活動を行った。１年生は、まずは大きな新聞を広げることから大変で、机から新聞を落としながらも、一生懸命に新聞を読んでいた。ほとんどまだ読めない字がたくさん並ぶ新聞の中に、自分の知っている字をみつけて〇をつけさせたり、気に入った写真を切り取って、クリアファイルに集めたりした。２年生は２年目だったので、慣れた様子でとても楽しんで新聞に目を通していた。２年生も気に入った記事を切り取ってクリアファイルに集めた。中学年以上も２年目ということもあり、１０分間とても集中して新聞を読んだり、気に入った記事を切り取ったりすることができた。

②図書委員会の取り組み

図書委員会では、曜日ごとの当番活動として、毎日小学生の記事の中から注目するニュースを選んで切り抜き、全校の児童に紹介するコーナーを設けている。選んだ記事を図書館前に掲示し、わかりやすいように見出しを児童が書いて貼っている。またその日の毎日小学生新聞のピックアップニュースに関する本も一緒に置いて、さらに詳しく知ることができるようにしている。

③「新聞博物館学習キット（新博キット）」の利用

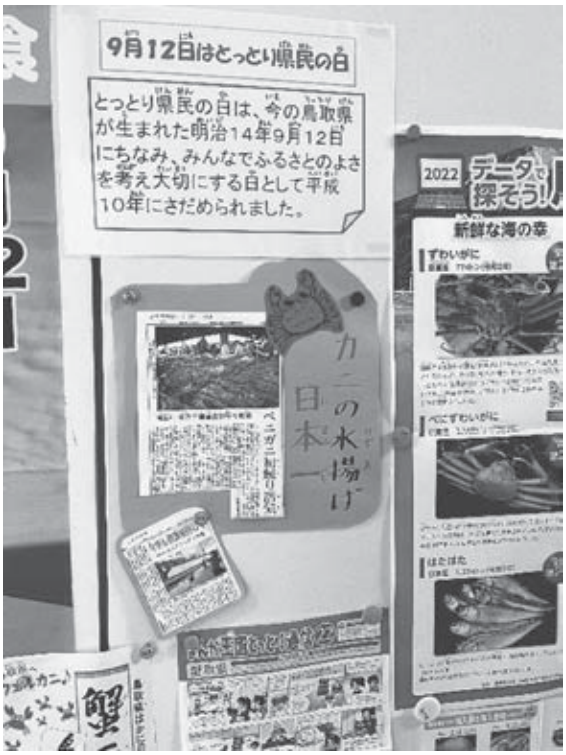
神奈川県にある日本新聞博物館より、全国の同じ日の新聞を 121 部送っていただき、図書館に「新聞大集合！」と題して展示･閲覧できるようにした。同じ全国紙の新聞社のものでも、よく見てみると発行している地域によって内容が異なっていることや、１月の大雪の日の記事だったため、大雪に関する内容が１面になっていることが多かったが、北海道から沖縄までの地方紙の１面も地域によって異なっていることなど、比べてみると面白いもので、児童も手に取って読んでいた。

④ＮＩＥコーナーの設置

昨年度から引き続き、玄関前にＮＩＥコーナーを設置し、毎日届く４社の各新聞を児童が自由に読めるようにした。読み終わった新聞は新聞社ごとに下のＢＯＸに入れておき、各学級で自由に使えるようにした。また、会見小学校に関するホットな記事も掲示した。

⑤校内での新聞記事の掲示

校内の階段や踊り場、廊下など児童の目につくところに、南部町や鳥取県などの身近な地域のことに関する記事を掲示した。



⑥その他の取り組み

以下は本校のＮＩＥの取り組みから波及して、児童が主体的に新聞を使った取り組み。

休憩時間に新聞で工作（３年）

音楽の合奏練習で音をおさえるため新聞で作ったばちで練習（３年）

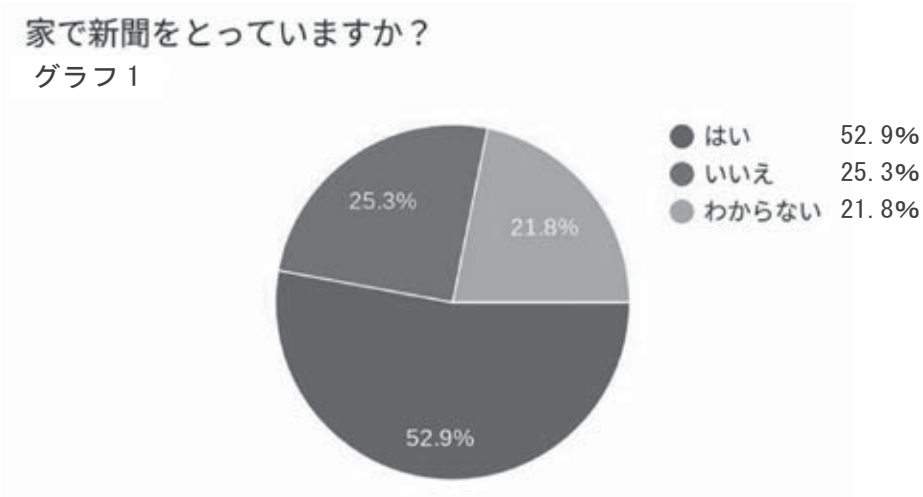
夏休みの自由研究
「世界の記事を読んでまとめよう」（６年）

自学で新聞切り抜き（６年）

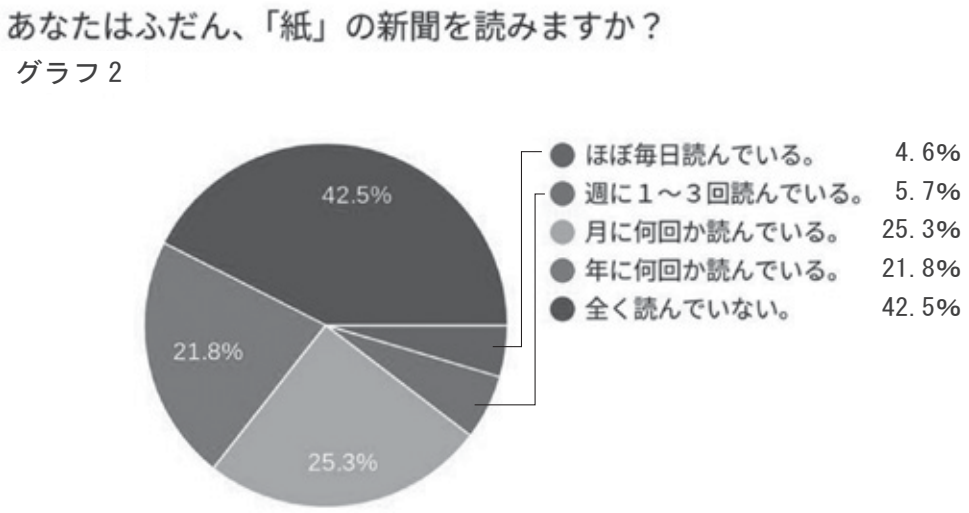
３　実践を振り返って

２年目ということもあり、朝新聞ＤＡＹの取り組みも慣れてきて、児童も新聞を身近に感じることはできているように思う。今年度の目標であった「表現力」「読み取る力」を高める取り組みに向けて、各学年の実態や発達段階に応じて、新聞に親しみをもつこと、また自分の思いや学んだことなどを相手意識をもって文章化して伝えること、さらにたくさんの情報の中から必要なものを読み取ったり要約したりする活動ができた。

３学期に４年生から６年生の児童（８７名）が新聞に関するンケートに答え、以下のグラフのような結果が出た。

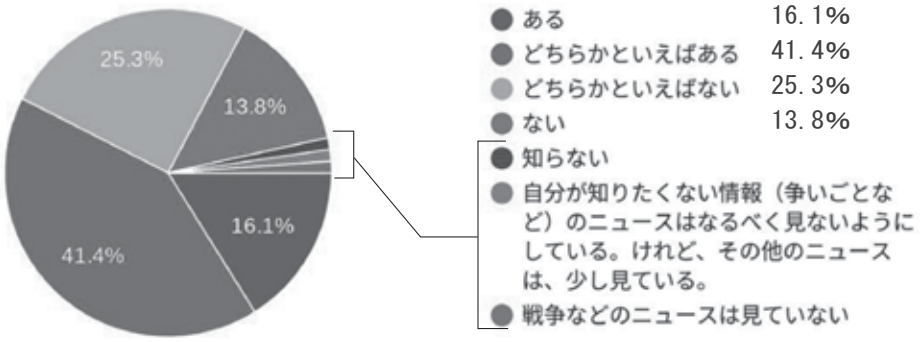


家で新聞をとっている家庭は約半数ということが分かった（グラフ１）。新聞を毎日読んでいる児童は極めて少ないが、全体の６割近くが読んでいると回答したので（グラフ２）、朝新聞ＤＡＹの影響もあってこのような結果になったと思われる。



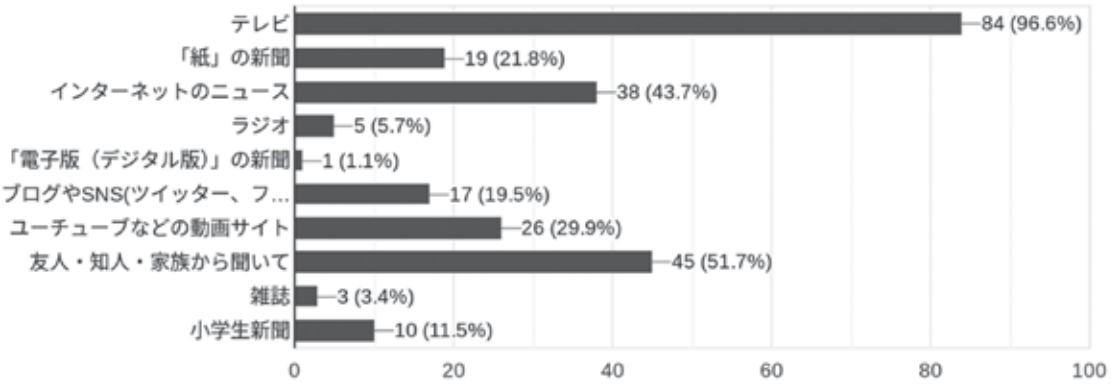
また、約６割近くの児童が、地域や社会で起きている問題や出来事に興味や関心があると答えていた。自分が見たくない情報（戦争や争いごとなど）は見ないようにしていると答えた児童もいた（グラフ３）。

あなたは、地域や社会でおきている問題やできごとにきょうみや関心がありますか？
グラフ３



テレビで情報を得ている児童が９６．６％で圧倒的に多く、インターネットのニュースや友人・知人・家族から聞くという児童も半数近くいた。新聞で情報を得ている児童は、２１．８％で、小学生新聞と答えた児童も１１．５％いた（グラフ４）。

あなたはふだんどのような方法で、ニュース情報を知りますか？（いくつでもえらんでいいです）
グラフ４



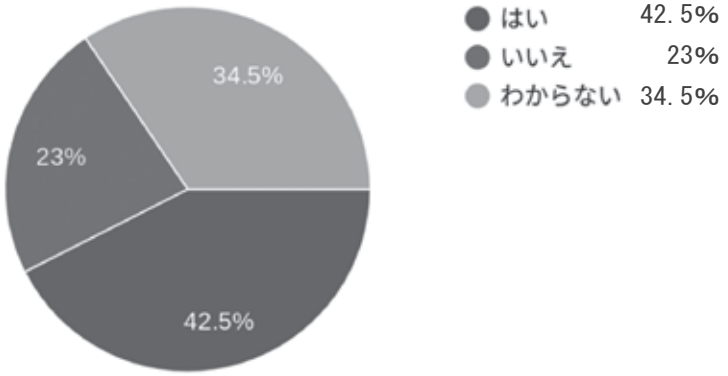
朝新聞ＤＡＹや授業などで新聞を手にしたり読んだりする機会が増えたと答えた児童は４２．５％で（グラフ５）、以前と比べて新聞の良さを感じたと答えた児童が３２．２％（グラフ６）だった。どちらも「わからない」と答えた児童が多かったが、良さの具体例を例示しなかったので、児童自身の実感としてははっきりしなかったのかもしれない。

新聞の良さを感じた意見としては、「日本から世界、地域のことまで広い分野を知ることができる」「正確な情報を知ることができる」と、あらゆる広い分野の確かな情報が得られると実感していることがわかった。また「いつでも読める」「残しておける」「見返せる」「切り取ることができる」など、朝新聞ＤＡＹなどで自身が体験したことから感じたと思われる意見

もあった。さらに「新聞を読んでいたら、授業などで問題を読んで考えるときに意味がわかるようになったので、新聞を読むだけでも勉強につながると思った」「社会がどうなっているかわかるし、新聞にのっている言葉を覚えたりできる」と、自身の学力向上につながっていると実感している児童もいた。

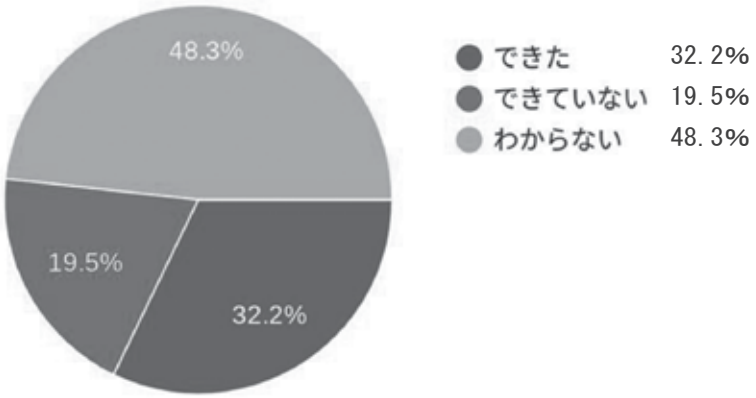
朝新聞デーや授業などで新聞を手にしたり読んだりする機会が前よりもより多くなったと思いますか？

グラフ５



以前と比べて新聞の良さを感じることができましたか？

グラフ６



加えてアンケートで、新聞を使って今後やってみたいと思うことがあるかという質問に対しては、「新聞を使って工作や遊びがしたい」という回答や、「会見小学校での出来事やニュースなどを新聞にできたらいいと思った」「気に入った記事を切り取ってノートに貼って取っておきたい」「昔どんな事件や災害があったか調べてみたい」「先生に言われたニュースを誰が一番早くみつけられるかゲーム」など、さらに新聞に興味をもって取り組みたいという具体的な案がでてきたことはとても嬉しかった。今後も朝新聞ＤＡＹは継続し、児童が新聞を用いて「読み取る力」や「表現力」を高めていけるよう、各学年に応じて新聞活用を続けていきたい。

学びを深めるＮＩＥ　～紙面と画面の往還の中で～

鳥取市立桜ケ丘中学校　平尾　尚子

１　はじめに

（１）本校の概要

本校は令和５年度、創立４４年を迎える生徒数４９８名の中規模校である。田園風景の広がる中に桜色の校舎が建ち、すぐ隣には住宅地、少し歩けば商業店舗の並ぶ大通りがある。そこからさらに先に進むと、バイパスの両側には工業団地が広がる。山を切り開いて建設されたニュータウンは、国道から見えるよりも奥まで続いている。多様な特徴をもつ複数の小学校から、生徒たちは本校に入学してくる。

本校の特色である少人数グループアプローチ「桜咲タイム」は、実践８年目を迎える。毎週水曜日の午後、１０分間のふれあいは、生徒の人間関係を円滑にし、このグループは授業での協働学習にも活用されている。また、以前から取り組んできた学びの型に「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」があるが、昨年、「深い学び」を構築するための新しい「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」の型を構成し、ＮＩＥでも実践したことは後述に示す。

（２）取り組みを通しての変容

令和３年度、１年間の実践を通じて新聞への関心が高まり、目に見える効果があったと共に、新たな課題も見えてきた。以下に調査結果の一部を紹介する。

研究１年目は、国語を始め、社会、総合的な学習の時間などでの新聞の活用、朝新聞の全校導入、図書委員会とタイアップしたイベント活動などを中心に取り組んできた。その成果として、「何らかのコンテンツでニュースに触れている」と答えた生徒は、令和３年度７月では「ほぼ毎日」、「週に２、３回以上」を併せて６６％であったのが（図１）、令和４年度３月には７５．２％（図２）に上昇した。

あなたは新聞やテレビ、インターネット等でニュースを確認しますか。

図１　令和３年度７月

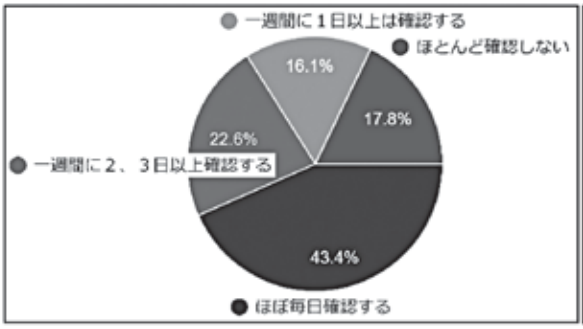
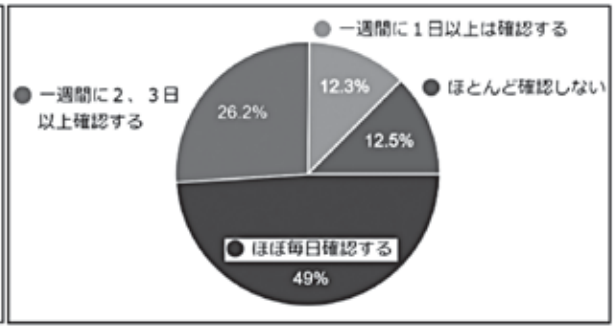


図２　令和４年度３月



世の中の出来事に「関心がある」、「どちらかと言えば関心がある」と答えた生徒は、令和３年度７月では併せて７４．２％であったのが（図３）、令和４年度３月には７７．７％（図４）に上昇した。

あなたは社会問題や世の中で起きているできごとに、興味や関心がありますか。

図３　令和３年度７月

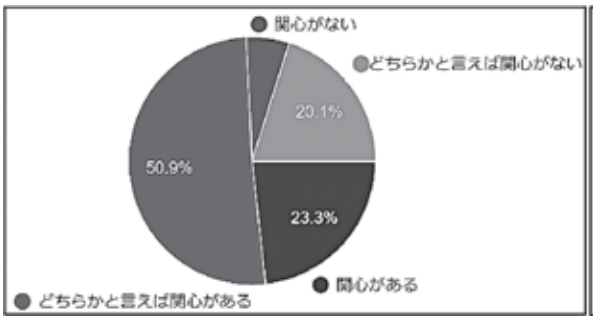
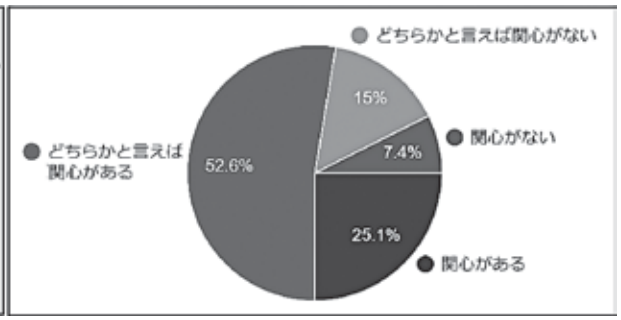


図４　令和４年度３月



ニュースで確認するジャンルは令和３年度７月では１「新型コロナウイルス」、２「スポーツ」、３「芸能」、４「オリンピック」と続いていたが（図５）、令和４年度３月には１、２は変わらなかったが、３に「政治・経済」が続き、４に「社会・地域」が「芸能」と並んで浮上した（図６）。ただし、令和４年度３月調査では、「オリンピック」の項目は削除している。

また、「政治・経済」の回答率が上昇しているが、「政治」には興味があっても「経済」に興味のある生徒は決して多くないことが、体感としてはある。日々の小遣いのことは話題に上っても、国家経済、世界経済の問題については、生徒の口にほとんど上ることがないからである。

「新聞ロトセブン」のことは後述するが、７紙が集まる期間、７紙のトップニュースがそろったことがあった。日本銀行総裁の人事を告げる記事である。惜しくも休日で、生徒が当日のうちに全ての記事を目にすることはなかった。そこで、「新聞ロトセブン」取組中であることを踏まえ、３年生全クラスで７紙が同時に報じた出来事は何かと尋ねてみたところ、どのクラスでも生徒が第一に挙げたのはトルコ大地震のことであり、正解したクラスはなかった。日銀総裁の人事については異動があったことも知らない生徒が多かった。

あなたがよく確認するニュースのジャンルを教えてください。（複数選択可）

図５　令和３年度７月

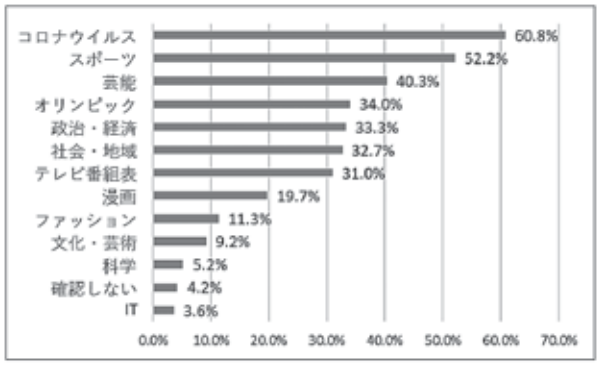
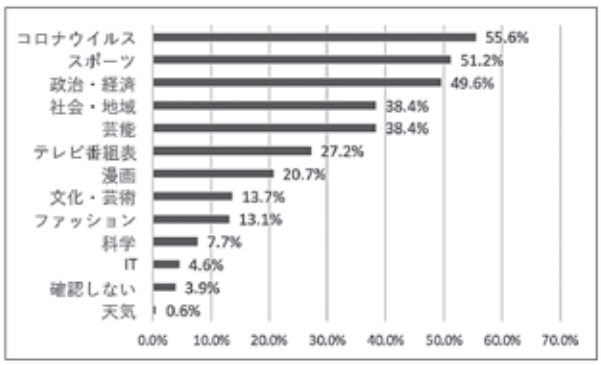


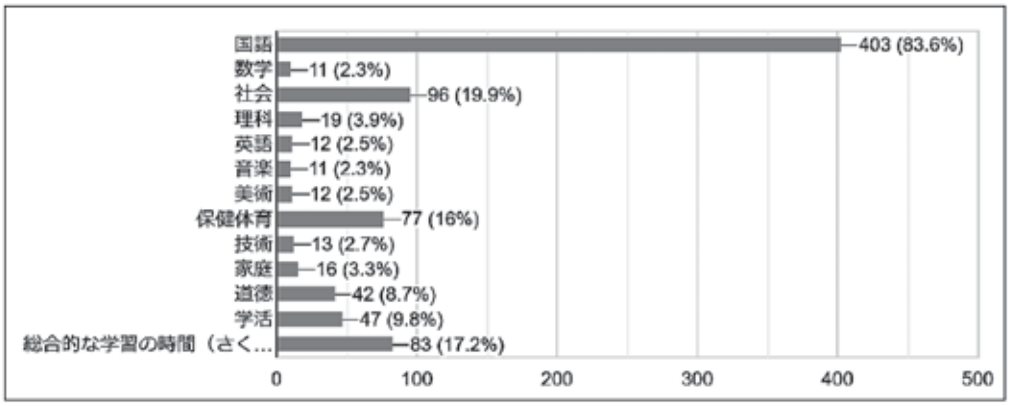
図６　令和４年度３月



さらに令和４年度にＮＩＥ実践２年目を迎え、「教科の学習で新聞を扱ったか」という質問を新たに追加したところ、１「国語」８３．６％、２「社会」１９．９％、３「総合的な学習の時間」１７．２％、４「保健体育」１６％という結果であった（図７）。これは、実際に新聞を扱ったかどうかではなく、生徒の中で授業内での新聞活用場面が強く印象付けられた結果だと考えられる。

教科の学習で新聞について学んだり、新聞を扱ったりすることがありますか。

図７　令和４年７月



（３）２年目の課題

令和４年度開始時点では、

①社会に対する関心は高まったが、物の見方や考え方が充分に育っていない

②新聞に触れる機会が増えたが、学習として新聞の読み方や活用の仕方を学ぶ機会に偏りがある

ということが課題として挙げられた。また、「情報」の視点でとらえたとき、タブレット端末との均衡をどのように取っていくか、ということも鍵となると考えた。

（４）２年目の目標

これらの課題を踏まえ、ＮＩＥ２年目の目標を、

①国語科を中心に、学習材としての新聞の活用を広げること

②新聞を活用して教科や自主学習において学びを深めること

のように設定した。特に①においては、生徒に印象深く残っている国語の授業を１年生から３年生まで、教科書の学習内容を骨子としながら、系統的な取り組みを構築すること、社会や総合的な学習の時間、生徒個々の自主学習などにおいてインターネットによる情報収集も含めて、新聞の活用を広げていくことを視野に入れた。

２　実践の内容

（１）朝新聞と新聞スクラップ

令和４年度３年生は、ＮＩＥの研究指定を受けるより前の入学当初から、新聞スクラップに取り組んでおり、本校の新聞スクラップはその活動を全校に広げたものである。令和４年度も引き続き、新日本海新聞社の朝新聞制度を活用した新聞スクラップに取り組んだ。令和３年度との違いは、令和３年度は３月を除いて朝新聞と新聞スクラップを紐づけていたが、令和４年度は定期テストや行事の前には、新聞スクラップは課さずに、読むことに専念させ、通常日程で学習に集中しやすい期間に新聞スクラップを課すというめりはりをつけた。新聞の配布や呼びかけ、完成したスクラップの選別・掲示は図書委員会が行い、各学年の担当教師も指導にあたった。

また、令和３年度までは記事の見出しをそのまま示していたが、令和４年度後半からは、改めて自分で記事の見出しをつけ、感想をまとめるスタイルを取った。タイトルを自分で付

ける上で注意したことを自由記述で問うたところ、「分かりやすく伝わるように」「読む人の興味を引くように」などの、表現の仕方を工夫したと答えた生徒が４５．６％、「内容をよく読んで理解すること」「本文と合っているか」など、本文を熟読したり、本文に相応しい内容になるよう工夫したりしたと答えた生徒は３４．３％と、記述した８５．２％の大半を占めた。このことから、ただ見出しを書き写すよりも、自分で見出しをつける方が、より良く読み、伝えようとしたことが明らかになった。

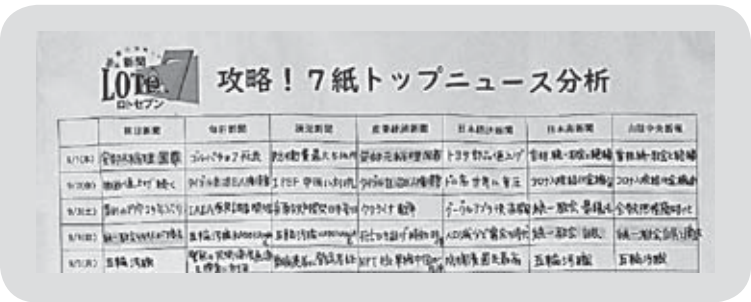
朝、静かに新聞をめくる２年生

（2）ロトセブンと新聞スタンプラリー

図書委員会の取り組みとしてロトセブンに引き続き取り組んだ。新聞の提供によって揃う７社の新聞のトップニュースが、指定された１週間（登校日の５日間）のうち、何社同じ題材を扱うかを当てるイベントである。２年目となり、生徒にも取り組みが定着し、システムをよく理解して参加していた。学校司書が特別新聞コーナーを設置し、１ヶ月間の一面の見出しを一覧にして掲示した。

ロトセブンは世の中で何が起きるかに結果が左右されるため、１週間前に事前予想するのは困難で、誰でも平等に当選のチャンスがある。読むことが苦手な生徒や、主催する図書委員も同じように参加できる点にメリットがある。

新聞スタンプラリーは、令和４年度は実施しなかった。あちこちに掲示してある毎日のニュースをチェックして、スタンプを集める取り組みは、移動教室や昼休憩の委員会活動、放課後の部活動などの中で、１日も欠かさずすべてチェックするのが難しく、初期に機会を逃してしまうとその後は参加を諦めてしまう生徒が多かったためである。１週間に一度、ニュースを掲示し続けることや、１ヶ月間の取り組みとすることも考えたが、答えだけを人から伝え聞く機会を増やしてしまうことや、生徒の集中を１ヶ月持続させるのが難しいことなどから、令和４年度は取り組みを見送った。



渡り廊下「桜通り」の新聞コーナーに７紙を掲示した。一覧になった１ヶ月分の一面の見出しを読むと、世の中の流れが俯瞰できる

（３）ゲストティーチャー授業

２年国語「新聞記事を比較しよう　～オリンピック開幕の記事を比べて読む～」として、読売新聞社より樽本安友支局長を、毎日新聞社より望月靖祥支局長をゲストティーチャーとして迎え、７月に授業を行った。同じ授業で、令和３年度にはオリンピック開幕の記事を利用しており、当初は令和４年度の旬の記事を利用したいと考えていた。しかし、一面トップニュースを読み比べるという趣旨、中学２年の発達段階にふさわしいもの、新聞社によって物の見方・考え方に特徴が現れるものなど、条件に合うものが年度当初に見つからず、教材研究や担当者との打ち合わせも考慮し、前年度同様オリンピック開幕の記事を活用することとなった。

新日本海新聞社より取材もあり、この授業について読売新聞、毎日新聞、日本海新聞の３紙に記事が掲載され、生徒たちは自分たちの取り組みを取り上げた記事で、実生活の中でも新聞の読み比べを体験することができた。

「記事切り口 読み比べて」

特別講師の鳥取支局長

学校で新聞を活用する「NIE（教育に新聞を）」の授業が27日、鳥取市桜谷の市立桜ヶ丘中学校であった。読売新聞鳥取支局の樽本安友支局長(55)が特別講師として、新聞の役割や報道姿勢を伝えた。

授業には2年約30人が出席。昨夏の東京五輪の開会式を報じる1面記事を題材に、読売新聞など7紙から2紙を選んで読み比べた。

続いて4～5人のグループに分かれて「見出しが違う」「新型コロナウイルス対策」「記事の書き方も変わってくる」などと感想を発表した。

樽本支局長は読売新聞の報道について「実例ずくめの大会だからこそ、準手の活躍や大会の運営をありのまま伝え、記録することに重点を置いた」と紹介。

各紙の違いなども踏まえて「いろんな切り口があるので、興味のある記事を読み比べてみて」と呼びかけた。

菅愛美さん(14)は「何げなく読んでいる新聞に、工夫がたくさんあることがわかった」と話していた。

全国紙 読売新聞

ゲストティーチャーとして、読売新聞社より
樽本安友支局長を迎えた折の記事
（2022 年 6 月 28 日付　読売新聞朝刊）

読み比べて見極める

桜ケ丘中で記者が授業

NIE（教育に新聞を）の取り組みとして、鳥取市桜谷の桜ケ丘中（音田正顕校長）で27日、読売新聞鳥取支局の樽本安友支局長(55)をゲストティーチャーに迎えて授業が行われた。昨年の東京五輪で金銀メダルを獲得した柔道の阿部一二三選手の記事を題材にし、記事の内容や大きさ、写真の扱いがどうだったかなどを比べ、情報を読み解く力を高めるねらいがあった。

樽本支局長は、意見の違いや見方が異なる例を示した。「同じ出来事でも、新聞によって見方が異なる」と伝えた。生徒たちは、タブレット型端末を使い、各紙を読み比べながらグループ内で意見交換した。

菅愛美さん(14)は「新聞社によってとらえ方が違うから、記事の書き方も変わってくると勉強になった」と話した。

授業は、7月1日まで同校の2年生5クラス全員が新聞の読み比べを通じて、毎日、毎週に計5回実施する。

東京オリンピック開幕を伝える2021年7月24日付の朝刊1面に注目。生徒たちは3～4人のグループに分かれ、タブレットで紙面を見ながら「この新聞は写真がきれい」「こちらは記事が一番だ」などと意見を発表し合った。

授業には望月靖祥・毎日新聞鳥取支局長(58)が特別講師として参加。「ネットにはフェイクニュースも多い。新聞を読むことで、どのニュースが信頼できるのかを見抜く力を養ってほしい」と呼びかけた。

東京オリンピック開幕を伝える記事を見ながら意見を交換する生徒たち＝27日、鳥取市桜谷の桜ケ丘中

全国紙 毎日新聞

左記の授業を新日本海新聞社からも取材があり、同時に報じた
（2022 年 6 月 28 日付　日本海新聞）

7 新聞読み比べ 異なる特色学ぶ

鳥取・桜ケ丘中

教育に新聞を活用する「NIE（教育に新聞を）」の一環として、の国語授業が4日、鳥取市桜谷の市立桜ケ丘中（音田正顕校長）の2年生クラスで順次、行われ、生徒たちは7種類の全国紙や地方紙を読み比べて新聞ごとに異なった特色があることを学んだ。

桜ケ丘中は2021、22年度のNIE実践指定校。授業では、グループに分かれ、タブレットで新聞ごとの見出しを比べながら意見を発表し合った。

毎日新聞鳥取支局長(58)が特別講師として参加。「ネットにはフェイクニュースも多い。新聞を読むことで、どのニュースが信頼できるのかを見抜く力を養ってほしい」と呼びかけた。

グループに分かれ、タブレットで新聞ごとの見出しを比べながら意見を発表し合う生徒たち＝鳥取市桜ケ丘中

全国紙 毎日新聞

毎日新聞社より、望月靖祥支局長を迎えての
ゲストティーチャー授業を伝える記事
（2022 年 7 月 8 日付　毎日新聞）

（４）「一緒に読もう！新聞コンクール」の活用

①取り組みの概要

ゲストティーチャー授業をはじめとする国語授業で、取り組みの後の発展的学習として、「一緒に読もう新聞コンクール」に全校で取り組んだ。提供された７紙を活用し、全校生徒に一人一部の新聞を配布して記事を選ばせ、グループで意見交換を行いながら実践した。

説明を聞き、記事を選ぶ１年生

付箋を使って意見交換する２年生

②桜ヶ丘版アクティブ・ラーニングとの関連

本校には「深い学び」を構築するための授業の型に「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」がある。「思考力・判断力・表現力」を育成することを目的とした授業については、右の流れで構成することとしている。

桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング［改定型］
①「目標・授業の流れの提示」
②「個別の取組」
③「グループでの取組」
④「全体交流の実施」
⑤「グループでの取組（④を深める）」、
　作品制作などの場合は「個別の取組
　（自身による再考、発展的・挑戦的な制作、
　④を深める等）」
⑥「二度目の全体交流や評価問題の実施」
⑦「振り返り」

話し合ったことを発表し、教師がまとめて終わり、という授業スタイルでは、生徒の深まりに差があることが多い。この「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」では、話し合いの後、それをよりどころにさらに深いテーマを与えて各自が思考し、その内容を改めて話し合ったり、レポートにしたりするものであり、一度の授業で二度の話し合い活動や、思考の場面があるところに特徴がある。

「いっしょに読もう！新聞コンクール」のワークシートを教室で活用する場合、個人で選んだ記事を読み、まずはその感想を個人で書く。その後、記事や感想を紹介しあい、友人の選んだ記事や感想に対し、意見を述べ合う。そして、その意見をもとにさらに自分の考えを深めていくという形となる。これは、深い学びを構築するための「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」の型と一致する。「いっしょに読もう！新聞コンクール」の応募用紙の形式は、段階的に、学びを深める方法として優れている点、本校の学びのスタイルと合致している点で、今後も活用していきたいと考えている。

③資料の提示の仕方

今年度の取り組みでは、いろいろなニュースに触れることを目的として、新聞社も日付も異なる新聞を、一人が一部ずつ手に取り、その中から自由に記事を選ばせた。これは生徒が自ら広くニュースを集めようとする点、多様なニュースを紹介し合える点で有効であった。

一方で、考えを深めるのに相応しい記事を選択できていないケースや、深い内容ではあるものの、事象として大きすぎ、中学生としては、自分自身の問題に引き寄せるのが難しい記事を、選択しているケースも散見した。

生徒の発達の段階や、記事に書かれている内容などを考慮して、ふさわしい記事を提示し、その中からより良い選択ができると、意見を深めたり、視野を広げたりすることにつながりやすかった。また、生徒同士の意見交換だけでは広がり、深まりに限界があり、家庭に持ち帰って家族の見方、考え方をレポートしたものの中に、優れた意見が多かった。

④読解力との関係

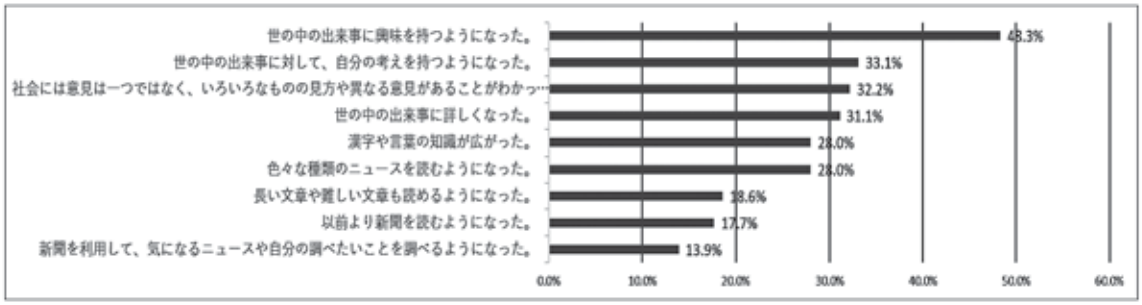
以下は令和４年度の資料だが、「長い文章や難しい文章も読めるようになった」と答える生徒は意外にも多くなく、この回答は７番目に位置している（図８）。そこで、新聞スクラップにおける生徒の記事の選び方を分析すると、「一面のトップニュース」、「地域の温かい出来事」、「コロナウイルスの感染状況」、「ウクライナの戦況」、「その他、写真の印象的なもの」が中心であった。多くは、出来事を端的に伝えるもので、新聞社それぞれの方針はありつつも、記者の主張や主観、物語性などは、比較的抑えられた文章を選んでおり、一面や二面の社説などを選択する生徒は、少ない傾向にあった。

取り組みを伝える読売新聞の記事
（2022年10月３日付　読売新聞朝刊）

事実を客観的にわかりやすく伝える、ということを第一として書かれた記事は、新聞を読み慣れてしまえば生徒にとっても難易度は高くない。言い換えれば生徒は、事実として書かれている出来事を読み取れば良い、いわゆる「読みやすい」記事を読んでいるということになる。高校入試問題の論説文レベルの文章を読み解く力をつけるには、社説などを中心に、記者の主張が論理的に構成されているもの、出来事を単なる時系列ではなく時を遡って印象的に伝えるもの、事象の原因をさまざまな材料を用いて分析し、さらにそこに記者の考えを投入したものなど、より高次の読解力を要する記事も積極的に紹介し、読ませていく必要があると考えられる。

朝新聞や新聞スクラップを通して、どのような良い変化がありましたか。

図８　令和４年度３月

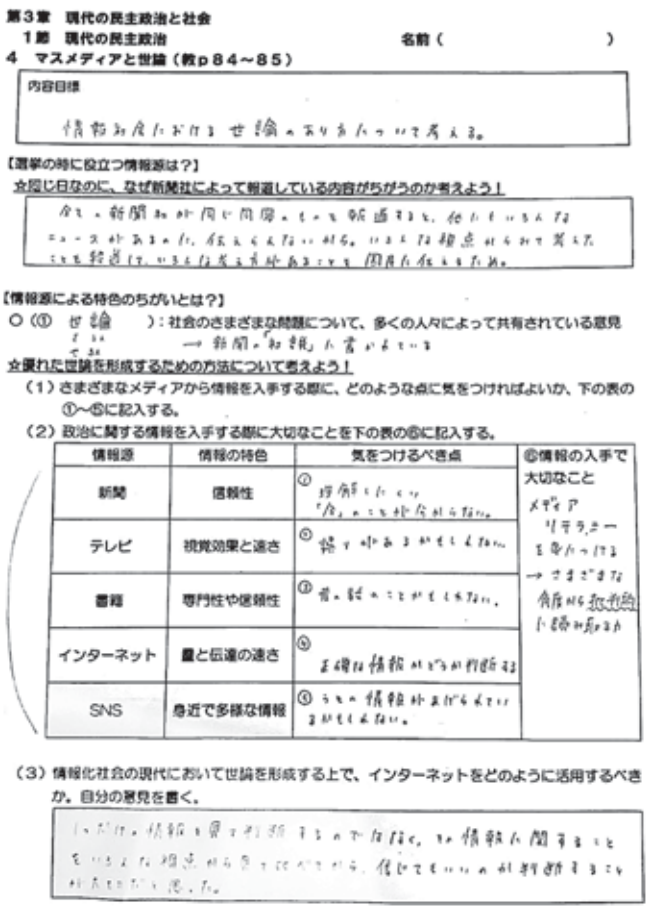


（５）社会科授業の新聞活用

国語科を中心に新聞の学習を行ってきたが、ＮＩＥ実践２年目は他教科にも取り組みを広げたいと考えていた。そこで、社会科の「現代の社会と民主政治　－マスメディアと世論－」の単元で実践を行い、「情報化社会における世論のあり方」と題して、授業を展開した。

過去の新聞の例を取り上げて解説されている教科書の内容を、実際に日々の新聞を読み比べて確かめていくというものである。新聞提供や、学校で購読している新聞を利用して、実際に各社の社説を読み比べた。同じ日に発行された新聞でも、取り上げられている内容が違うこと、同じ内容でも記者のものの見方、考え方の違いが表出することなどを学んだ。

社説はその日あったことの事実を伝えるだけではなく、事柄の経緯や、記者・新聞社の立場や主張、世論に向けて語りかけるものである点などから、読み解くには難易度の高い文章である。また、世論の形成や、様々な社会問題についても学んでおく必要がある。読解力の点、知識や視野の広がりにおいても、３年間の学びの集大成と言える。１年次から段階的に指導し、最終的には世論に目を向け、記事を批判的に読んだり、自分の意見をもったりして、さらにはそれを交換できるような生徒の育成を目指したい。


第３章　現代の民主政治と社会
１節　現代の民主政治　　名前（　　）
４　マスメディアと世論（教ｐ８４～８５）

内容目標
情報社会における世論のあり方について考える。

【選挙の時に役立つ情報源は？】
☆同じ日なのに、なぜ新聞社によって報道している内容がちがうのか考えよう！

【情報源による特色のちがいとは？】
○（世論　）：社会のさまざまな問題について、多くの人々によって共有されている意見
→ 新聞・報道 に書かれている
☆優れた世論を形成するための方法について考えよう！
（１）さまざまなメディアから情報を入手する際に、どのような点に気をつければよいか、下の表の①～⑤に記入する。
（２）政治に関する情報を入手する際に大切なことを下の表の⑥に記入する。

情報源	情報の特色	気をつけるべき点	⑥情報の入手で大切なこと
新聞	信頼性	①	メディアリテラシーを身につける → さまざまな情報から取捨選択し読み取る
テレビ	視覚効果と速さ	②	
書籍	専門性や信頼性	③	
インターネット	量と伝達の速さ	④	
SNS	身近で多様な情報	⑤	

（３）情報化社会の現代において世論を形成する上で、インターネットをどのように活用するべきか。自分の意見を書く。

授業で使用したワークシート

３年生社会科の授業で、各社の社説を読む生徒

（６）自由課題としての新聞の活用

３年生では、時事問題対策として、社会事象について自分の考えを述べる課題を出した。生徒は、各自、家庭の新聞やインターネットニュースで、年末の重大ニュースなどを中心にテーマを探した。また、面接指導や個別相談の待ち時間には、朝新聞で配布された日本海新聞や、朝日ＳＤＧｓジャーナルを読み、時事問題対策として、世の中で起きている問題や、自分の

考えをまとめる生徒の姿が見られた。また、特色選抜入試ですでに合格が決定している生徒の中には、高校から与えられた作文課題のテーマを朝日ＳＤＧｓジャーナルの中から探し、まとめている者もいた。新聞は持ち帰らずに他の学習教材とともにロッカーに保存している生徒もあり、時間になると取り出してタブレット端末と共に利用していた。

新聞を読む３年生

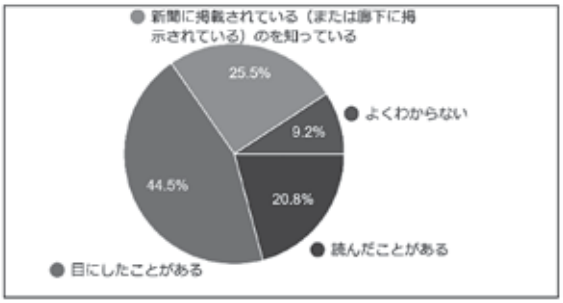
面接練習の風景

（7）本校が取り上げられた記事

記事のジャンルとは別に、本校が取り上げられた記事を読んだかを問うたところ、２０．８％の生徒が「読んだことがある」と答えた（図９）。また、じっくり読み解かないまでも、「目にしたことがある」と答えた生徒は４４．５％、「知っている」と答えた生徒も２５．５％で、自校の記事には高い関心がうかがえる。普段、新聞を読み慣れていない生徒などには、新聞への導入として有効であると言える。

本校について掲載されている記事を読んだり、目にしたりしたことがありますか。

図９　令和４年度３月



とっとり東中部・中海圏域

自分の名前、手話で

聴覚障害知る特別授業

桜ケ丘中

鳥取市

鳥取県内で活動する「手話クラブなどを支援する県教育委員会」が鳥取市桜ケ丘中を訪れ、外部講師として授業を行った。1年生のクラスが手話の歴史などを学び、聴覚障害について理解を深めた。

県教育委員会は幼稚園や保育所、学校、職場などを対象に、手話の発祥や手話言語条例、聴覚障害の特徴などを説明。講師は多目的ホールで手話通訳及び文化員の手をまねる生徒たちの様子を見ながら、「見たままを手で表現する言葉として伝わるのが印象的だった。困っている人に出会った時に役立ったと話した。（佐伯宗吾）

1年生の手話教室について報じる日本海新聞
（2023年２月16日付　日本海新聞）

「鳥取文芸」の帯やポップを作成した本校美術部を取り上げた日本海新聞
（2022年12月21日付　日本海新聞）

2023年(令和5年

入学までにやっておくべきことを真剣に説明する中学生（鳥取市で）

6年生に中学生活指南

鳥取 桜ヶ丘中生 若葉台小訪れ

鳥取市立桜ヶ丘中学校の生徒会メンバーが、校区内の市立若葉台小学校を訪ね、同中への進学を控えた6年生約30人に中学生活の心構えをアドバイスした。

同中と校区内の4小は毎月、中学生が母校の朝のあいさつ運動に参加するなど連携に力を入れている。さらに一歩進め、中学生活に不安を感じがちな6年生に先輩の声を届けようと「ドリームプロジェクト」と題した訪問を始めた。

4校目の24日は、生徒会長の西尾珠海さん(14)ら2年生の3人が参加。児童への事前アンケートや当日の質疑で、不安なこととして多く挙がった「部活と勉強の両立」については「日々の授業を大切にする。分からないことは周りにすぐに聞く」などとアドバイスした。

6年の倉本うららさん(11)は「先輩の話を聞いて、友達づくりも部活も積極的にがんばることが大事だと思った」と笑顔だった。

小学校との連携事業「ドリームプロジェクト」について報じる読売新聞
（2023年1月28日付　読売新聞朝刊）

３　取り組み２年間の変容

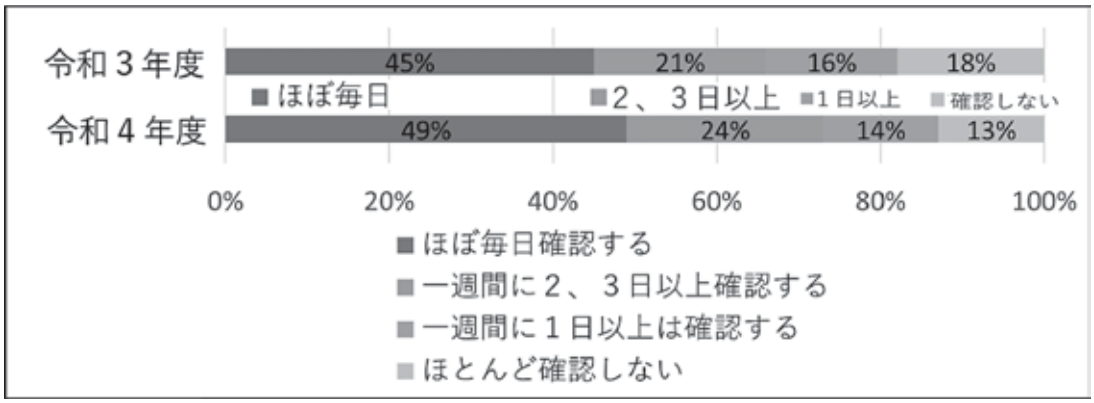
（１）新聞・社会への関心

冒頭で述べたように、２年間の取り組みを通して新聞や社会の事象に関する興味関心は向上したと言える。卒業していった生徒、新しく入学してきた生徒を除き、この２年間を通してＮＩＥの対象であった、令和２年度入学生徒（開始時２年生）と令和３年度入学生徒（開始時１年生）に絞って分析してみたところ、「何らかのコンテンツでニュースに触れている」と答えた生徒は、令和３年度７月では「ほぼ毎日」、「週に２、３回以上」を合わせて６６％であったのが、令和４年度３月には７３％となっていた（図１０）。

また、世の中の出来事に「関心がある」、「どちらかと言えば関心がある」と答えた生徒は令和３年度７月では７４％であったのが、令和４年度３月には７９％となっていた（図１１）。これは、１年間だけ取り組んだ平成３１年度入学生、令和４年度入学生を含んだ数値よりも高い結果であり、継続して取り組むことの成果を表している。

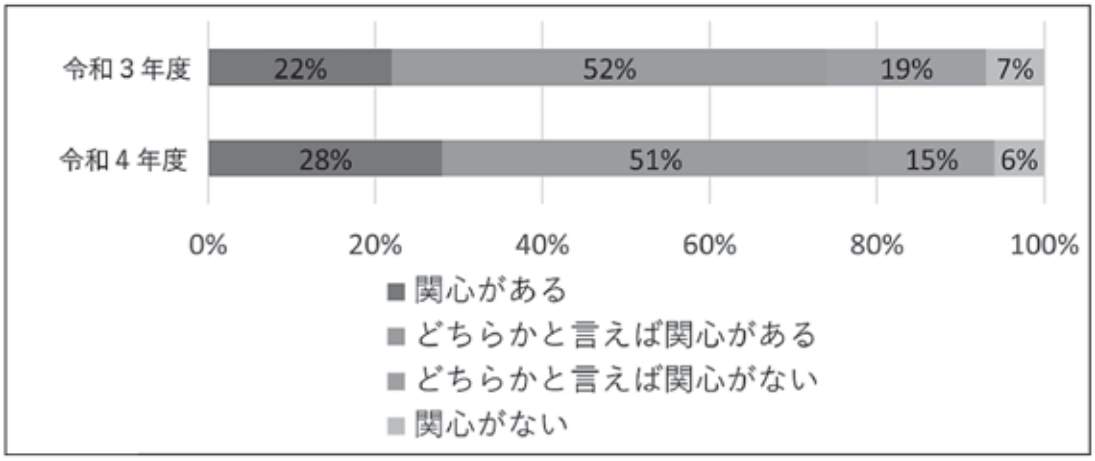
あなたは新聞やテレビ、インターネット等でニュースを確認しますか。

図１０　令和３年度７月と令和４年度３月の比較
令和２年度入学生及び令和３年度入学生のみを抽出したもの



あなたは社会問題や世の中で起きているできごとに興味や関心がありますか。

図１１　令和３年度７月と令和４年度３月の比較
令和２年度入学生及び令和３年度入学生のみを抽出したもの



（２）情報を得るツールの変化

このように、新聞を読む生徒の増加、社会への関心の高まりに良い変化が見られたものの、その情報を得る手段には２年間で大きな変化が見られた。以下は、令和３年度７月（図１２）、令和３年度１月（図１３）、令和４年度７月（図１４）、令和４年度３月（図１５）の調査結果である。令和３年７月からの３回の調査では、さほど大きな変化は見られない。ところが、令和４年度３月調査では一変する。まず取り組み一年目、情報を得るのに用いた手段として、「ネットニュース」と答えた生徒が令和３年度７月には１０．１％、令和３年度１月には１０．７％、令和４年度７月には１１．６％と、大きくは変わっていない。ところが、令和４年度３月調査では１７％と、急激に増えている。２年間継続してＮＩＥの対象であった生徒に絞ると、１９％から３４％に増え、より顕著な変化が見られる（図１６）。

本校では、令和２年度末にタブレット端末が配備され、令和３年度より、各教科で順次使用が開始された。令和３年度は授業で指示のある時のみに制限されていた使用が、令和４年度には、休憩時間等も許可を得て自主学習に使用してよいこととなり、各教科の課題や、入

試の時事問題対策等のために、昼休憩などにも使用する姿が見られるようになった。学校でのタブレット端末の利用状況と、調査結果が変化した時期が重なっているのである。

これは、生徒の社会への興味と、ＧＩＧＡスクール構想がマッチした結果ではないかと考えられる。一方で、もしもＮＩＥに取り組んでいないままタブレットのみを与えていた場合、令和３年度７月の時点で興味のあったスポーツや芸能など、得る情報の種類に偏りが見られる結果となっていた可能性も否定できない。

ＧＩＧＡスクール構想のもと、一人一台端末が整備されたこと、高速に進む情報化のために、生徒がニュースに触れやすくなった一方で、情報の扱い方、読み方などを適切に指導していく必要に迫られていると言える。

あなたはニュースをどのようにして知ることがもっとも多いですか。

図１２　令和３年度７月

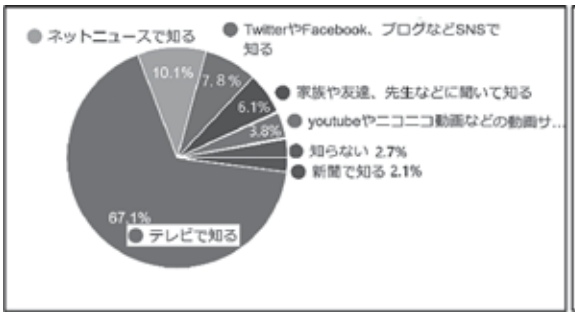


図１３　令和３年度１月

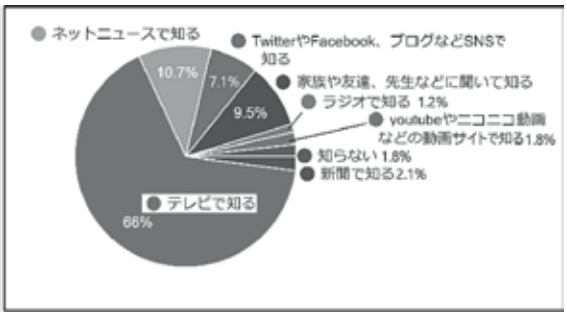


図１４　令和４年度７月

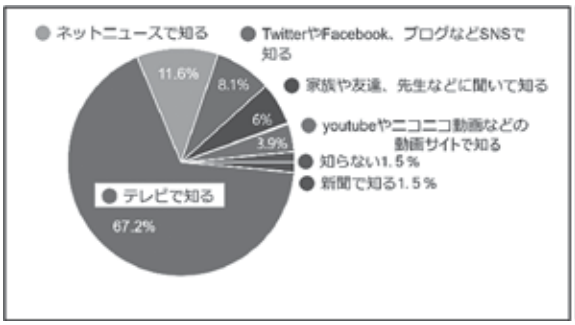


図１５　令和４年度３月

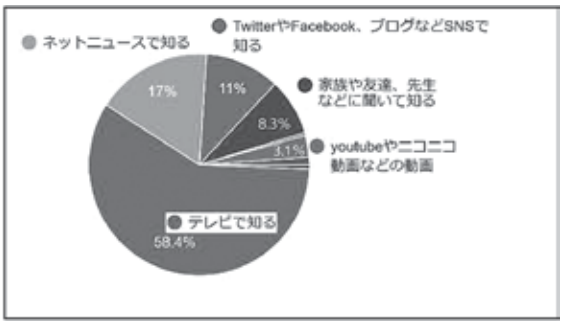
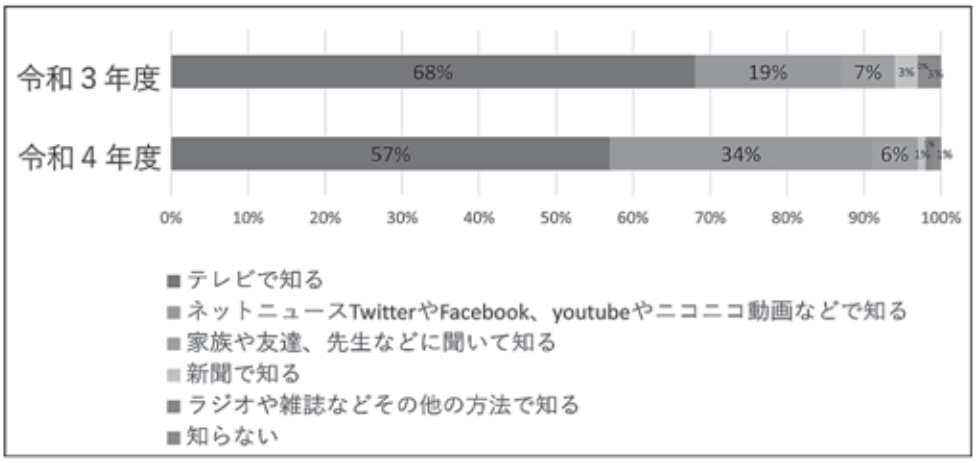


図１６　令和３年度（令和３年度７月）と令和４年（令和４年度３月）比較
令和２年度入学生及び令和３年度入学生のみを抽出したもの



（３）良い変化に対する自覚

１年ごとに、朝新聞や新聞スクラップが自分にどのような良い変化をもたらしたかを問うた。１年目の令和３年度１月（図１７）、２年目の令和４年度３月（図１８）とも、「世の中のできごとに興味を持つようになった」と答えた生徒が最も多かった。また、この回答率が令和３年度は４１．１％だったのが、令和４年度は４８．３％に上昇している。続いて、令和３年度は５番目に位置していた「世の中のできごとに対して、自分の考えを持つようになった」と答えた生徒は２３．１％から、令和４年度は３３．１％に増え、上位２番目に上昇している。

これらの回答だけでなく、全体的に新聞を読むことに対して肯定的に捉えている生徒は増えている。令和３年度は６番目に位置していた「世の中のできごとに詳しくなった」の回答も、令和４年度は４番目に位置を変えている。これらの情報は、（２）で述べた「あなたはニュースをどのようにして知ることがもっとも多いですか」の結果と合わせて考えると、一人一台端末を利用して情報を得たということになる。しかし、もう一つ忘れてはならないのは、そこで自分の趣味嗜好ではなく、世の中に目を向け、世の中の出来事を生徒に探ろうとさせたのは、ネットではなく「紙の新聞の力」だということである。

朝新聞や新聞スクラップを通してどのような良い変化がありましたか。

図１７　令和３年度１月

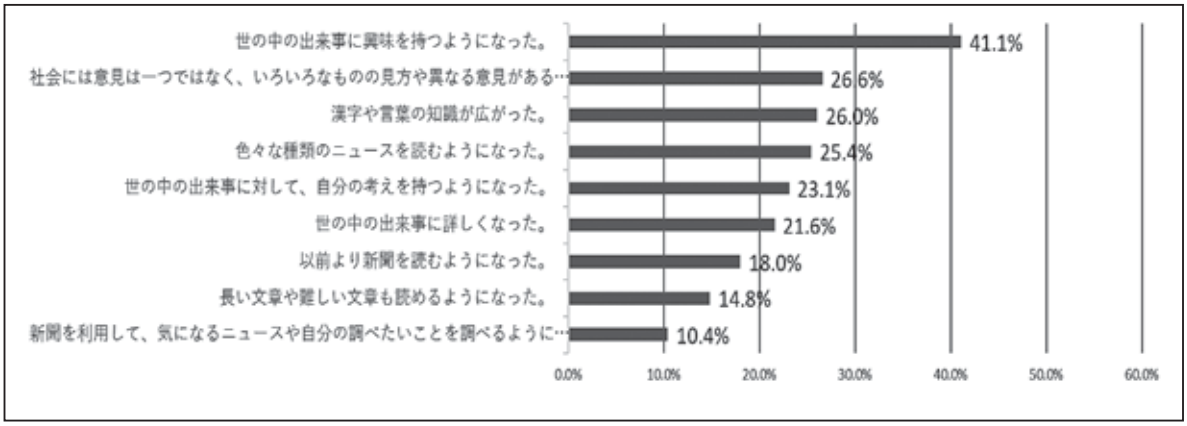
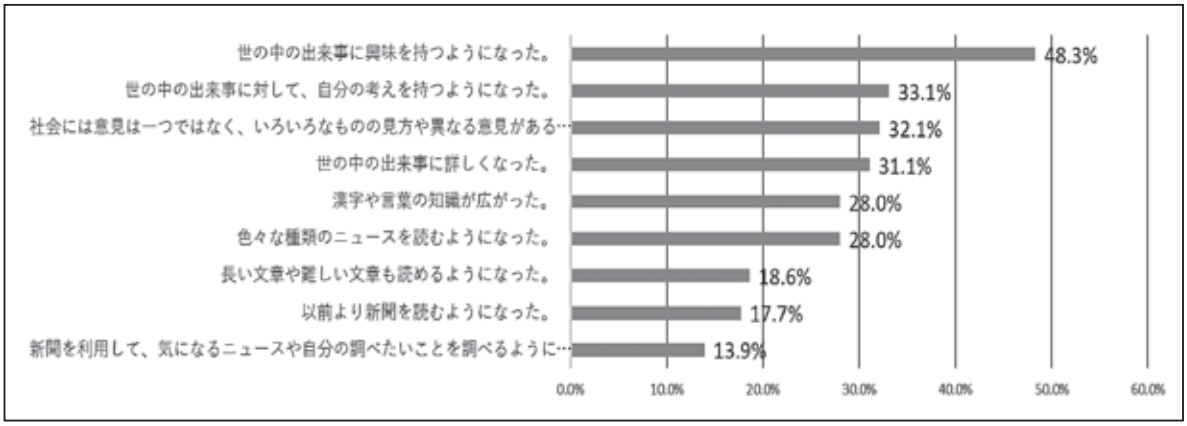


図１８　令和４年度３月



４　おわりに

２年間の取り組みを通して、取り組みを継続すればするほど、生徒の目は社会に向けて開かれていくことが分かった。１年目の取り組みの成果は停滞することなく、生徒の中に蓄積されていったからである。また、新聞の読み方を指導することで、その効果は格段に高くなることも分かった。

ＧＩＧＡスクール構想のもと、一人一台端末が整備され、社会の事象について意欲的に探究していく姿が生徒たちの中にあった。その下支えとなったのは紙の新聞である。生徒たちは紙の新聞から得た情報をもとに、より多くの情報や、別の視点で書かれた情報をインターネットで集め、吟味し、自分の考えを持つようになっていった。

紙の新聞の一覧性、網羅された情報から、自分の興味のある内容について即座に、多くの情報をタブレット端末で得る。車輪は片方だけではなかなかうまく進まない。新聞の紙面、とタブレットの画面とを、車の両輪のように乗りこなし、使いこなしていくことが、子どもたちの視野を偏りなく、より広くすると言える。

それらを用いながら、記事の読み方や、多面的なものの見方を指導し、深い思考を養うことが、子どもたちのより豊かな生き方へつながるのである。

湯梨浜学園の取り組み

湯梨浜学園　ＮＩＥ担当
大西　　圭

（１）取り組み初めから現在まで

本校は、ＮＩＥ教育を取り入れて７年目。実践校に認定されたのはこれが２度目である。この間、教員だけでなく、生徒がＮＩＥを使った取り組みを自主的に行うようになってきた。この度は、その取り組みの一部を紹介させていただく。

（２）世の中と繋がること

新聞は自分と社会との接点を感じる窓口である。新聞から、「授業で学習していることは、自分の身近な社会で、実際に起きているんだ」「自分にも関わるんだ」「自分と世界は繋がっているんだ」ということに気づけることができる。

また、実際に社会に生きる人々のたくさんの生き様に出会うこともできる。しかも、とてもタイムリー。コラムなども、社会には多様な見方・考え方があることを知り、今までとは異なった視点から物事を見たり考えたりして自分の考えを深めるヒントになる。

それを知るには、まず新聞に親しんでもらうことから始めなければならない。そこで、私たちは「朝新聞」を実施することにした。朝の５分間に新聞を読み、地域の話題やスポーツなど、さまざまニュースに目を通し、見聞を広げると共に、活字離れを防ぐことを目的にしている取り組みである。記事内容の一つ一つが各教科への関連性があるとして、授業の一環として取り入れ、中には、その場で生徒に１分間スピーチに取り組ませるクラスもあった。生徒からも、「５分で読まなければならないので、自然と集中して入り込んで読める」「見出しを追って情報を効率よく集めようとする習慣がついた」「新聞を家でも手に取って読むことが習慣となりはじめた」という声を聞くことができた。

（３）新聞から学ぶ

「新聞スクラップ」を取り入れた７年前は、何を書いてよいのか分からない生徒が多く、なかなか筆が進まなかったが、新聞を切り抜き、貼る活動はそれだけで楽しく、新聞記事を自分だけのものにしていく実感がある。まずはそこからだった。

新聞には、様々な種類の文章が載っている。その中には、学習や日常生活に直接役立つ文章が多くある。記事には、「５Ｗ１Ｈ」が的確に表現されているので、最低限必要な情報を整理し、人に意見を伝える論文のためのよい教材となる。また、記事のいわゆる逆三角形の構造からは、自分の考え（結論とその根拠）をわかりやすく人に伝える学習が可能である。

このように新聞の記事を活用し、自分で考えることに気づいてからは、生徒たちは自分の言葉に敏感になり、文章を吟味しながら、実際に日常の中で用いる表現力を身につけていった。生徒の中には家族で新聞記事について話し合う者まで出始めるようになった。家族でできる活動を工夫すると、コミュニケーションの場ができる。このような効果も新聞にはあるということを知った。

（４）興味・関心を伸ばす

生徒の興味・関心を伸ばすことも継続して行った。「テレビ欄は見る」、「スポーツ欄は面白いよね」。そのような声をよく耳にしていた。それらに共通していること、それは、「興味がある」ということ。興味があるから読む。そこで、自分の学校のことが掲載されていた記事を玄関に掲示することから始めた。貼り始めてすぐに効果が出た。玄関横を通る生徒が必ず一読をするのである。このような見える形で掲示するとこれまで以上に読む。何とも不思議なものである。また、記事を更新すると、その変化に生徒は気が付く。

（５）生徒主体の取り組みとして

生徒自らの発案での取り組みがより充実しはじめた。図書委員では「図書委員が選ぶ今日の一面」、保健委員では「今週の医療ニュース」を選ぶという取り組みである。いずれも生徒が主体となっての取り組みなので、普段から新聞記事を読む習慣がないとそもそも仕事が出来ないということがポイントである。そして、その活動は７年経ち、生徒が自主的に活用し、今ではお昼の放送で、「図書委員会の紹介する新聞記事」といったコーナーを設け、紹介するほどになった。また、この取り組みが新聞に取り上げられたことで生徒の自信にも繋がり、次の取り組みを考えはじめる生徒も出始めた。全てを教員が教え、導くのではなく、自主的に動けるようにする取り組みの重要性を感じた。

新聞ラジオで意見交換
湯梨浜学園中高 NIE最前線

NIE最前線 ひとっとり 6

新聞ラジオで意見交換

湯梨浜学園中高

令和4年 10月6日 読売新聞

（６）取り組みが実を結ぶ

これらの取り組みがようやく実を結んだ。新日本海新聞社さん主催の「第８回児童生徒新聞感想文コンクール」において、最優秀賞をはじめ５名が、また、学校賞を本校がいただくことができた。この賞に恥じないよう、日々精進していきたい。

新聞感想文コンクール　最優秀賞

【中学生の部】

河野（かわの） 向日葵（ひまわり）さん（湯梨浜学園3年）

7月28日の日本海新聞「認知症、活動制限で悪影響」を読んで

「面会制限で、「ご家族と会えないまましくなる患者さんも少なくないんだよね」

これはある日、母親が仕事から帰ってきた時にさりげなく言った言葉だ。私の母親は、看護師をしている。私はいつものことだと思い、ひとごとのように「そうなんだ」と聞き流す。そんな日々を毎日送っていた私は、この記事を読んだ時にハッとした。

私の曾祖母は、先日九十二歳でしくなった。今から約四年前、新型コロナウイルスが流行していない頃。私は曾祖母と一緒に外食に行ったり、買い物をしたりすることが大好きだった。曾祖母は大きな畑も持っていて、元気に野菜を育てていた。

しかし、新型コロナウイルスが世界規模で広まり、世間が騒ぎ始めた頃だろう。外出することが難しくなったり、人と話す機会が減り、曾祖母は目に見えて弱っていった。曾祖母は、畑を一人では出来なくなった。また、歩くことさえ難しくなってしまったのだ。

ある日、久しぶりに顔を出しに行くと、「あんたは、だれだいな」と笑顔で尋ねてくる曾祖母。悪気もなさそうに私の目を見つめて返事を待っていた。私は、名前を忘れられただけでなく、顔も忘れられてしまっていることが辛く、その場にいられなくなった。

全てが新型コロナウイルスのせいだとは言い難いかもしれないが、この記事のように少なからず、私たち全ての人間に良い影響は与えていないと思う。

実際、私の曾祖母は新型コロナウイルス感染予防のため、外出を控えるようになってから歩けなくなった。いよいよ危険な状況になってしまった曾祖母は入院した。その時、私の母親が同時に新型コロナウイルスに感染してしまった。最後、曾祖母が息を引き取る時でさえ、面会は許されなかった。

この記事に書かれているように、もう少し病院の面会制限を緩めた方が良いと思う。十分な感染対策を行えば、感染リスクを下げることが出来る。そう考えると、面会して新型コロナウイルスに感染するリスクよりも、面会しないで認知症などの病気が悪化するリスクの方が高いような気がする。このことを少しでも多くの人に知ってもらい、考えてもらいたい。そして、今より少しでも病院での面会制限が緩和されることを願っている。

受賞コメント

最初は別の記事で感想文を書きましたが、読み手の心を動かす文章にしたいと思い、自分の経験を基に書ける記事を改めて選びました。新聞を読むと自分の経験と比較して新たな発見があります。異なる価値観とも出合えて楽しいです。

令和4年　10月14日　日本海新聞

最優秀賞：河野向日葵さん（中３）　優秀賞：伊藤　美海さん（中３）
優秀賞：岡田　明子さん（中２）　優秀賞：鳥飼　綾乃さん（中３）
優秀賞：河上　蓮美さん（中３）　学校賞：湯梨浜学園中学校

鳥取西高等学校の取り組み
～社会に拓かれたＮＩＥを目指して～

鳥取県立鳥取西高等学校　中野　美紀

１　はじめに

本校は令和４年度、鳥取県ＮＩＥ実践指定校に認定され、新聞を活用した教育活動に年間を通して取り組んできた。鳥取県のＮＩＥ活動は、地元報道機関や教育関係者によって１９９８年に設立された鳥取県ＮＩＥ推進協議会が中心となって進められてきたが、このたび本校もその一端を担うこととなった。

実践にあたっては、①大まかな年間計画をイメージする　②できることをできる範囲で実施する　③授業での新聞活用方法や教科横断的なコラボレーションを積極的に提案するという方針で進めていった。年間計画は以下のとおりである。

令和４年度

月	内　　容
4	
5	人権教育ＬＨＲ
6	主権者教育
7	新聞感想文コンクール いっしょに読もう！新聞コンクール
8	新聞投稿
9	
１０	人権教育ＬＨＲ
１１	沖縄研修旅行ＬＨＲ
１２	新聞投稿
1	
2	家庭科授業（福祉分野の記事提供）
3	課題研究

国語科授業（年間を通じて単元内容に応じた取り組みを行う）

理科（年間を通じて自然科学分野の記事を読む）

２　実践の概要

（１）国語科

①現代文

思考の深化や知識強化のため、単元テーマや目標に応じた関連記事を活用した。その具体例をいくつか紹介する。

○本文内容を一般社会に敷衍する

「寛容が自らを守るために、不寛容を打倒すると称して、不寛容になった実例をしばしば見出すことができる」(「寛容は自らを守るために不寛容に対して不寛容になるべきか」渡辺一夫)という一文について、どのような事例が該当するのか話し合った。ウクライナ侵攻に対する

国際連合の対応がその一例として挙がったので、検討資料として関連記事を複数示した。

○作者や作品の背景への認識を深める

小説「藤野先生」は、中国人留学生である主人公と、彼に多大な影響を与えた藤野先生の姿を描いた作品である。作者魯迅は、実際に仙台医学専門学校で藤野先生に師事し、小説の中で「私に熱烈な期待をかけ、辛抱づよく教えてくれた」と述べている。一方、魯迅自身も、島根県出身の中国文学研究者、増田渉の師として惜しみない指導助言を与え、彼を温かく導いた。新聞記事「魯迅―詩と書簡」では、魯迅の書「増田渉君の帰国を送りて」や増田への毎月の文通をもとに二人の親交を解説しており、国や立場を超えて思いやりに満ちた人間関係を築いた魯迅の生き方を知ることで、小説の理解をより深めることができた。

○学びの導入や読み比べを行う

自己形成をテーマとする評論「物語としての自己」（野口祐二）を読むにあたり、新聞の人生相談「やりたいこと見つからぬ」を導入として用いた。そして、「ほんとうの自分探し」という観点から、相談の回答と教科書本文を読み比べ、内容の共通項を読み解いた。

②主権者教育

○社会への関心を深め、主権者としての能動的態度を育成する

２０２２年７月の参院選前に、３年生の全クラスで主権者教育を実施した。社会問題に目を向け、主権者として主体的に関わっていこうとする態度の育成を目指した実践である。５月は沖縄本土復帰５０年の節目で、参院選の争点として「外交と安全保障」が注目されていたこともあり、まず初めに１０年前と現在の沖縄基地問題に対する意識を比較した記事を取り上げた。合わせて、鳥取県の淀江産廃場を巡る賛否両論の記事も紹介した。米軍基地や産廃場に限らず、不都合なものが近くになければそれでよしとし、無関心を決め込む例が身の回りにも存在してはいないか自己点検しながら、世の中を鋭く捉えてほしいと考えた。また、同性婚訴訟と境港市のパートナーシップ宣誓制度導入の記事も読み、全国的な話題を鳥取の身近な出来事に引きつけて考察できるよう心がけた。最後に、高校生による各政党への質問状提出や大学生の社会運動に関する記事を通して、政治参加の意義を確認した。

授業の様子

事例研究　注目した記事「淀江産廃場　許可申請へ」

早期建設へ向け歓迎　中間処理業者
納得いかないと不満　地元住民

淀江産廃地下水調査結果受け

授業のスライドの一部
（2022年７月３日付　日本海新聞）

○授業後のアンケート

主権者教育の約１か月後に実施したアンケートによると、選挙権行使について「関心がより高まった」と答えた生徒は７５％であり、「社会問題や世の中の出来事に対する関心が非常に高まった」「かなり高まった」のは合わせて４１％、「少し高まった」のは４９％と、一定の効果が認められた。

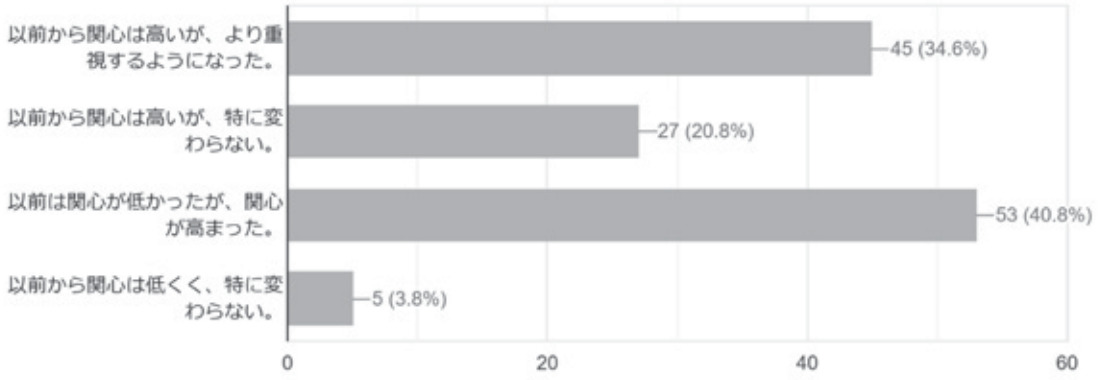
一方、新聞を読む習慣について、「授業以前はほとんど、または全然読まなかった」と回答したのは７２％で、授業の１か月後でも６４％だった。インターネットやＳＮＳといった新聞以外の情報源の利用増加や新聞購読者数の減少等、新聞に触れる機会が少なくなっている理由は様々あろうが、授業での継続的な実践や新聞を手に取りやすい環境の整備など、学校でできる工夫をさらに考えたい。

〔授業後の生徒の声〕

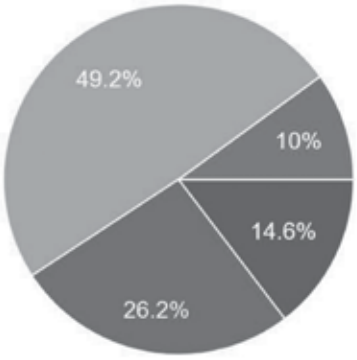
・同性婚や米軍基地問題などタイムリーなテーマの話を聞いて、とても楽しかったと同時に考えさせられました。現代社会の授業で習った人権より「生きた人権」だと感じました。
・若い世代だからこそ選挙に行って、政治に参加していくべきだと思った。授業がなかったら選挙の大切さなどあまり考えなかったと思うので、考え直す機会になって良かった。
・選挙ができる年齢になって、今までよりもテレビ等での政治に関するニュースに興味を持つようになりました。新聞をあまり読むことがなかったので、気になって選挙について新聞で読んでみると、面白かったです。
・私は両親が選挙には必ず行く方なので、選挙権を持ったら必ず投票に行こうと思っています。でも、正直どんなふうに考えたら社会のためになるのか、不安しかありませんでした。でも、授業を通して、沖縄の基地の問題やジェンダーの問題を考えてみて、自分にも考える力ってあるんだ、これからはもっと新聞やニュースに興味を持って、自分なりに考えてみようと思いました。

〔授業後のアンケート結果〕

２　主権者教育の授業後、自らの選挙権について、あなたの考えに変化はありましたか。

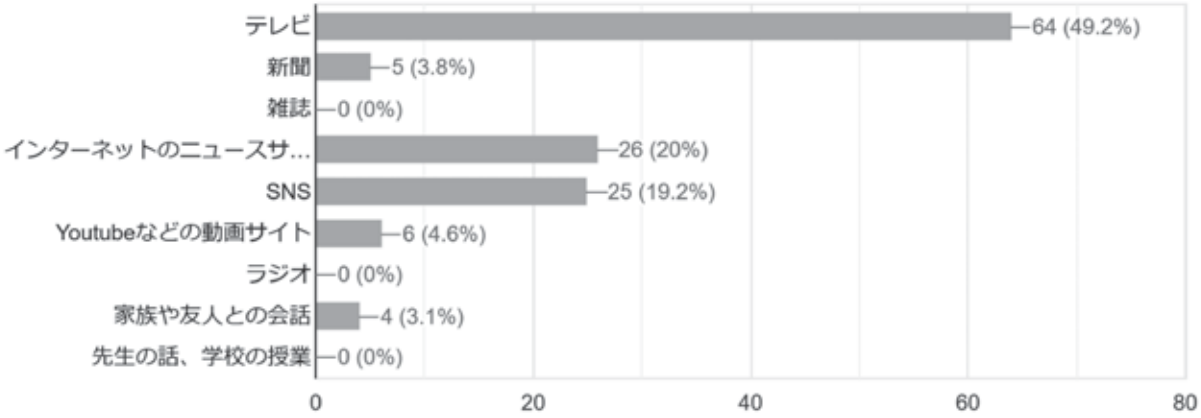


3　主権者教育の授業後、社会問題や世の中の出来事に対する関心は高まりましたか。

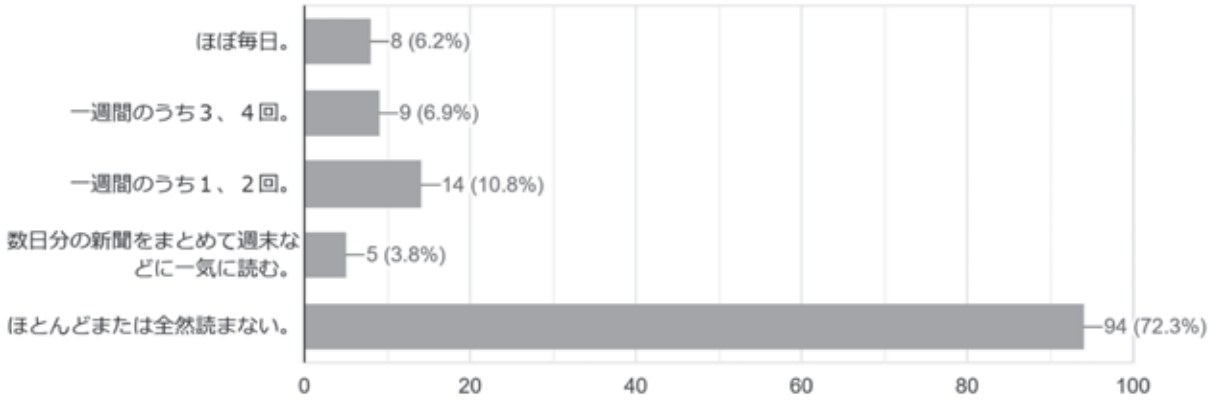


- 非常に高まった。 19（14.6%）
- かなり高まった。 34（26.2%）
- 少し高まった。 64（49.2%）
- 特に変わらない。 13（10%）

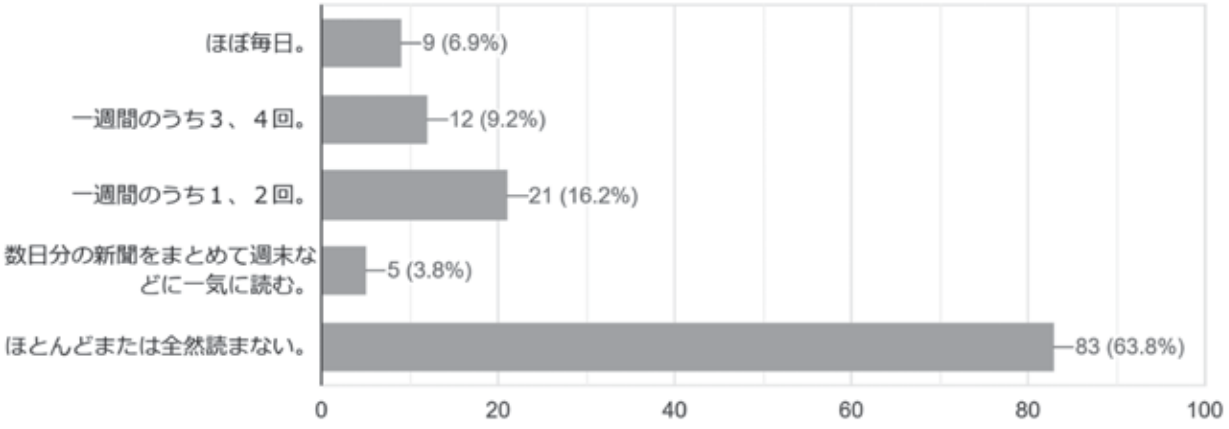
4　社会問題や世の中の出来事を知る情報源として最も多いものは、何ですか。



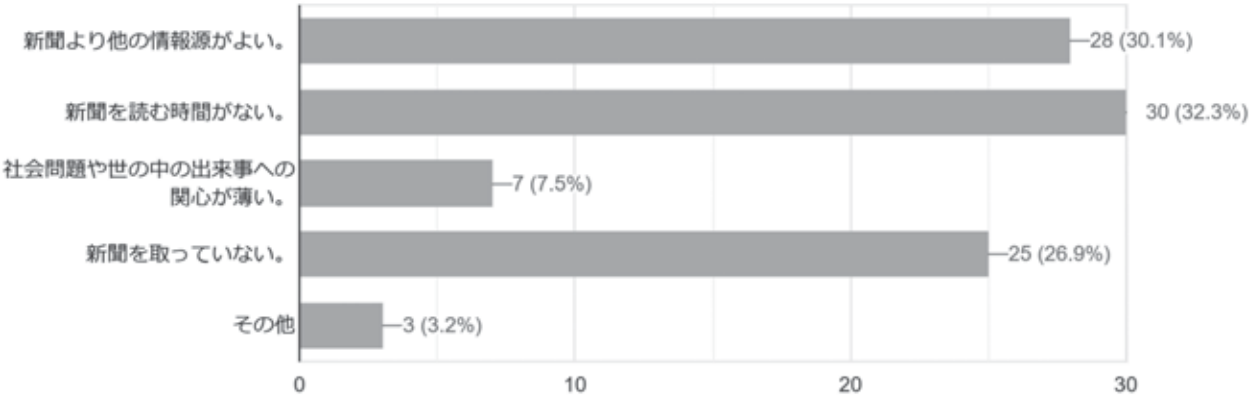
5　主権者教育の授業前までは、新聞をどの程度読んでいましたか。



６　主権者教育の授業後は、新聞をどの程度読んでいますか。



７　新聞をほとんどまたは全然読まない人の理由として最も当てはまるものは何ですか。



③各種コンクールや新聞への投書

○第８回日本海新聞・児童生徒新聞感想文コンクール

主権者教育を経て、社会問題や世の中の出来事をさらに幅広く捉え、自分なりの考えを的確に表現することを目標に、新聞記事を読んで意見文を作成した。生徒は、複数の記事の中から最も関心の高かったものを選択し、考えを１２００字以内にまとめた。

新聞記事を読む様子

「基地なき島」実現遠く

描けぬ道筋、国民理解求め

沖縄返還50年

【高校生の部】

諸家（もろいえ） 佑奈（ゆうな）さん（鳥取西3年）

5月16日の日本海新聞「基地なき島　実現遠く」を読んで

「基地なき島」実現遠く。この標題を見てはじめに思い浮かんだのは沖縄でした。おそらく、国民の多くが、沖縄のことだと連想すると思います。しかし、私たちはこの沖縄のことについてどのくらい知っているでしょうか。私はこの記事を読んで、はじめて、米軍統治下で児童福祉法が適用されず、支援の遅れで子どもの貧困率が全国の2倍であること、基地を中心とした経済構造だったため産業が育たず、県民1人当たりの所得が全国最下位であること、米軍用地返還額は、本土復帰時の53・7％から70・3％に増え上がっていることを知りました。これまで私が沖縄について知っていたことは、基地を移転するため、海の埋め立てを行っていること、米軍の訓練での音や落下物があることぐらいで、自分が、どれほど、沖縄について無関心であるのかを感じました。

記事の最後には、沖縄県知事である玉城知事の言葉が載っていました。「沖縄だけではなく、国民一人一人の生活に関わる問題であることを共有してほしい」。

この言葉を、どのくらいの人が正面から受け取り、向き合うことが出来るでしょうか。私は沖縄出身でもなく、そもそも訪れたこともありません。家族にも沖縄と関係がある人はいません。そして、家の近くに米軍基地はありません。なので、私が今この問題に無関心でいることは、けっして難しいことではないでしょう。しかし、私一人だけであっても沖縄が抱えている問題の一つだけに関心を持つだけでも、これらの問題を取りまく空気を変えていくことが出来ると思います。そして無関心から関心への変化は、問題解決への道のりで大きな変化となるのではないでしょうか。

「基地なき島」の実現。これには沖縄の人々の声だけでなく、無関心な人、関心は持っているけど気にとめない人、その全ての人々の声が一つになった時から、実現への一歩を踏み出し始めるのだと思います。

受賞コメント

記事に注目したのは、参院選を前に学校で主権者教育を受けたことで、社会問題への関心が高まっていたからです。基地問題から派生するさまざまな課題から、沖縄の人たちの大変な思いを知りました。伝えたいことをまとめるのに苦労しましたが、沖縄が身近に感じられるようになりました。

コンクール最優秀賞受賞作品
（2022 年 10 月 14 日付　日本海新聞）

○第１３回 いっしょに読もう！新聞コンクール

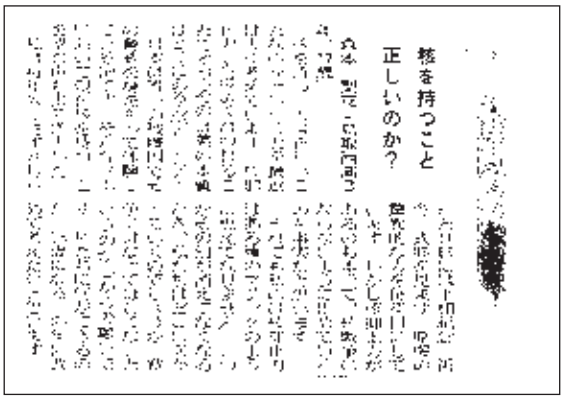
個人の感想や意見の表明にとどまらず、他者との意見交換を通して見識を広げることを目標に、日本新聞協会主催の新聞コンクールにも取り組んだ。友人同士だけでなく家庭でも記事について話し合い、世代による見方の違いへの気づきや考えの深まりを得られたことが、生徒の感想からうかがわれた。

新聞記事について意見交換する様子

奨励賞受賞

○新聞への投稿

８月は「自らの選挙権」と「戦争と平和」、１２月は「学校」をテーマに、それぞれ複数の新聞記事を読んでグループディスカッションをした後、自分の生き方や社会とのつながりを見つめ、４００字の意見文を作成した。計１７名の声が新聞紙面に掲載された。周囲から寄せられた意見や感想は、生徒たちに刺激を与えるとともに、大きな励みにもなった。



掲載された紙面
（2022 年 8 月 12 日付　日本海新聞）

以上の表現活動では、回を重ねるたびに生徒の意欲が高まり、作品の完成度が上がっていく様子が見られた。他者の目を通して発見される新しい観点によって自己更新が促され、深まりのある表現につながったことと思う。

オンライン授業で再認識

掲載された紙面
（2022 年 12 月 6 日付　日本海新聞）

（２）理科

１年生では授業の最初に、自然科学分野の新聞記事を読んでおり、課題研究や進路選択の一助としている。

（３）家庭科

１年生福祉分野において、ヤングケアラーや高齢者福祉に関する記事を提供し、授業で活用してもらった。

他教科においても、授業内容に即した記事を補助的あるいは発展的に利用する授業は、その時々に行われている。

（４）ＬＨＲでの実践

①１年人権教育ＬＨＲ「身近な差別」

「すべて国民は、法の下に平等」だと憲法に示されてはいても、その権利の具体的内容は明記されておらず、人権は時代や地域、人によって常に可変のものである。近年では「忘れられる権利」が注目されているという新聞記事を導入として「人権とは何か」を踏まえた上で、「美術鑑賞は誰に向けたものか」について考察した。今年度、鳥取県では県立美術館開館に向けた準備が着々と進み、様々な期待や要望の声が寄せられ、連載記事も組まれている。そのような鳥取県の身近な話題に関連づけながら考えてもらいたいとの思いがあった。そして、目の不自由な人も参加できる「視覚に頼らない美術鑑賞」に関する新聞記事や動画「目の見えない白鳥さん、アートを見にいく」を紹介し、見えない人の美術鑑賞という発想や自らのバイアスを改めて見直し、あらゆる立場の人が学び楽しめる美術館として、さらにどのような視点や工夫が必要かを議論した。

また、次の授業では、人権の観点から関心を持った新聞記事を各自が切り抜き、グループに紹介して意見を述べあった。ウクライナ侵攻関連の記事に注目した生徒が多かったが、他にも男女差別や障がい者差別、外国人差別など、各クラスで様々なテーマが話し合われた。

授業の実践者からは「新聞記事の利用は、『人権問題は身近にある』ということを生徒に考えさせるのに効果的だった。」「生徒は様々な思いや気づきを熱心に話し合っていた。」という感想が寄せられた。

グループで話し合う様子

発表の様子

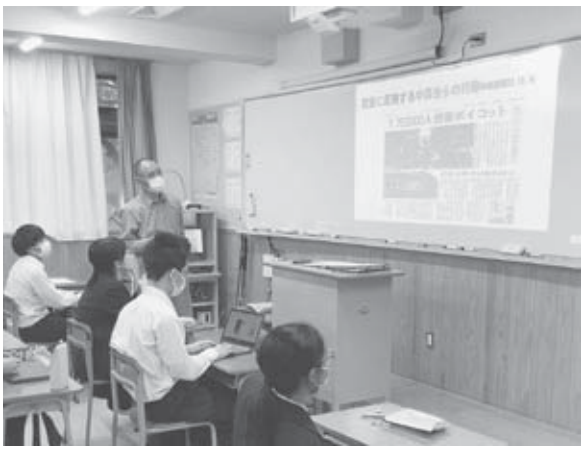
②３年人権教育ＬＨＲ「ジェンダーにおける差別」

新聞記事を通して性差別の背景に迫り、差別と自己とのかかわりを考えた。男性の育児休業取得の現状、医学部不正入試など、様々な形で現れるジェンダー問題を取り上げ、生徒同士の議論を深めた。体操服の男女統一や性的マイノリティーの更衣室利用、女性トイレのみの「音姫」設置など、話題は学校生活にも広がり、活発に意見が交わされた。

③全学年人権教育ＬＨＲ「多様な性」（人権問題講演会の事前学習）

南和行氏（なんもり法律事務所弁護士）による講演会「同性カップル弁護士夫夫(ふうふ)のカラフルデイズ―ＬＧＢＴＱのこと、僕のこと、君のこと―」に先立ち、ジェンダーや性的マイノリティーについて、全学年で事前学習を行った。

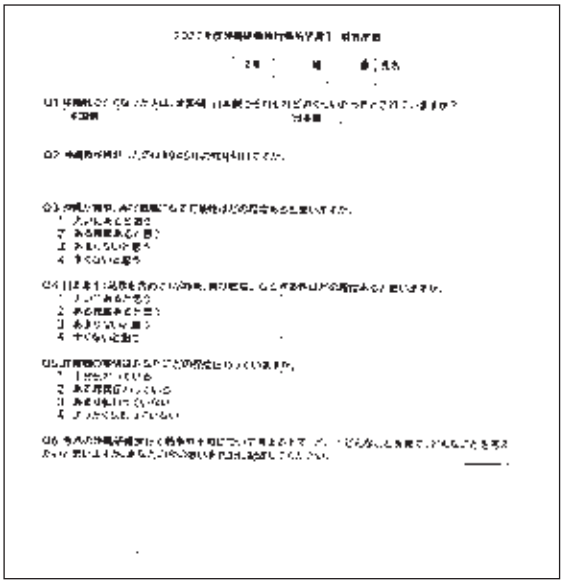
ジェンダーの観点からは「アンコンシャス･バイアス」「理工系女子の大学入学者割合７％」等の記事を基に、自身のバイアスや進学の考え方がどのように形成されてきたのか振り返る契機とした。また、性的マイノリティーの観点では、性的少数者の権利を巡る「米バージニア州中高生一万二千人授業ボイコット」等の記事を提示し、同年代の若者たちと自分たちの意識を比較しながら、どのような社会を創造していきたいか話し合った。



人権教育ＬＨＲの様子

④２年沖縄研修旅行ＬＨＲ

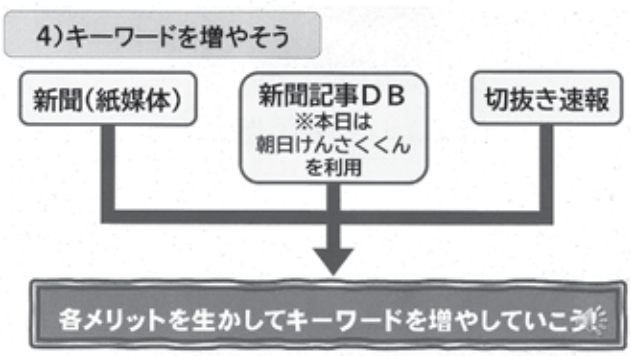
沖縄研修旅行にあたり、復帰５０年を迎えた沖縄の歩んだ道のりや平和への取り組みの理解を深めるため、特集記事「知る沖縄戦」を活用した。各自が記事を読み込み、質問プリントに答えながら沖縄戦への認識を深めた。それに加え、日本・韓国・台湾・カンボジア・ベトナムの大学生たちによる共同学習の動画（「２０２１平和への思い（ウムイ）」沖縄県作成）を通して、戦争や紛争の体験継承およびアジア諸国の平和構築への意欲を知り、研修旅行での学びに対するモチベーションの向上を図った。



授業のワークシート

⑤１年課題研究ＬＨＲ

各々の志望する学問分野や課題研究に関連する知識を広げることを目的に、新聞の情報収集についてのＬＨＲを実施した。



授業のスライドの一部

新聞記事の情報収集手段（紙媒体・データベース・切抜き速報）とそれぞれの利便性について確認した後、実際にそれらを用いた情報収集にあたった。自分の志望する学問分野と、学術的課題や社会課題との関係について新聞記事を通して考察した。

切抜き速報を見る生徒

データベースを使ってキーワードを広げる

（５）校内での新聞掲示

①企画部教育企画、情報科

科学分野で活躍している本校の先輩に関する記事や自然科学部の受賞記事等を掲示し、生徒の意欲喚起に努めている。

②企画部図書視聴覚

テーマに関連した新聞記事と図書資料を合わせて展示し、生徒の進路研究や課題研究、各種講演会に寄与している。また、年間を通して本校関連の記事を掲示している。図書館入り口ということもあり、生徒が立ち止まって読んでいる姿がよく見られた。

③芸術科

鳥取県立美術館設立を巡る各有識者の連載記事を掲示している。地元の芸術振興の動きに関心を持ってもらいたいと考えている。

図書館での掲示
「新聞で進路を考える」

書道・美術室前での県立美術館
設立に関する連載記事の掲示

④事務室

部活動の大会結果や各種大会、コンクール等での生徒の活躍を来校者にも見ていただけるよう、事務室前に記事を掲示している。

３　成果と課題

実践の一番の成果は「生徒の学びの重層化」である。様々な学習場面における新聞記事の活用は、机上の学びを社会問題や事象へとつなげ、世の中への関心を深めながら社会貢献に思いを巡らせる契機となった。そして、他者との意見交流を通して自己表現力を磨くとともに、新たな視点による自己更新を図ることができた。

また、具体的な授業実践の提案やコンクール受賞、投稿の紙面掲載によってＮＩＥに注目

が集まり、生徒教員ともども、新聞を用いた授業実践に対する興味関心が喚起された。３月に行った課題研究は、新聞を使いたいという教員の声が実を結んだ取り組みで、やってみようという意欲の高まりを感じた。

一方、課題に関しては「批判的思考による読解」が挙げられる。生徒はインターネットでの検索に慣れており、自分の意に沿う情報をピックアップして、それらを無批判に正解だとみなしてしまう傾向がある。しかし、紙媒体の複数紙を継続的に読む中では、検索だと見落としてしまう様々な情報に触れながら、多種多様な観点に基づく意見を知ることができる。その経験の積み重ねにより、情報を適切に判断する力も培われていくだろう。

一人で複数の紙媒体を日々読むのは難しい面もあろうが、学校は多様な生徒が共に学ぶ場である。各々の生徒がスクラップした記事をグループで回し読みするなど、気軽に継続できる取り組みを考えたい。また、新聞社のゲストティーチャーによる「新聞の読み方講座」なども積極的に利用したいと思う。

終わりに

これまでの授業においても、補助教材として新聞記事を利用することは度々あったが、本格的な実践は今年度からである。教科書での学びを机上にとどまらせず、自分自身や社会に敷衍して課題を発見し解決しようとする意欲や力の育成を目指しているが、新聞には学びと社会をつなげるヒントがあふれている。

高校での取り組みはささやかな一歩かもしれないが、これらの実践が生徒の中で芽吹いて世界を広げ、大きな成長をもたらすことを願っている。

NIE
Newspaper In Education
第27回
NIE全国大会
宮崎大会
いまを開き 未来を拓く NIE
2022
Miyazaki
日時
2022年 8月4日（木）・5日（金）
会場
1日目 8月4日（木） 宮崎市民文化ホール
2日目 8月5日（金） 宮崎公立大学
※大会終了後に一部を動画配信予定です。
【主催】日本新聞協会
【共催】宮崎県教育委員会、宮崎市教育委員会
【後援】文部科学省、日本NIE学会、文字・活字文化推進機構、全国学校図書館協議会、宮崎県市町村教育委員会連合会、
宮崎県校長会、宮崎県県立学校長協会、宮崎県私立中学高等学校協会、宮崎県PTA連合会、宮崎県高等学校PTA連合会、
宮崎県私立中学高等学校保護者会連合会、宮崎県教職員互助会、日本教育公務員弘済会宮崎支部、
宮崎大学、宮崎公立大学、南九州大学、九州保健福祉大学、宮崎産業経営大学、宮崎国際大学
【主管】宮崎県NIE推進協議会、宮崎日日新聞社
日本のひなた宮崎県

大会プログラム

1日目　8月4日（木）

【開会式】宮崎市民文化ホール・大ホール

11:30　開場・受付開始

13:30　挨拶　丸山昌宏（日本新聞協会会長）
黒木淳一郎（宮崎県教育委員会教育長）
西田幸一郎（宮崎市教育委員会教育長）

歓迎の言葉　河野誠司（宮崎日日新聞社代表取締役社長）

【全体会】宮崎市民文化ホール・大ホール

13:50～15:15　記念講演

演題　「リチウムイオン電池が拓く未来社会」

講師　吉野彰
（旭化成名誉フェロー・2019年ノーベル化学賞受賞者）

15:15～15:30　休憩

15:30～15:40　基調提案　田上幸雅（宮崎県NIE教育推進委員会委員長・宮崎市立生目南中学校校長／日本新聞協会NIEアドバイザー）

15:40～17:10　パネルディスカッション

タイトル「NIEで伸びる力、伸ばす力
～子どもたちを持続可能な未来の創り手へ～」

■パネリスト（50音順）
木幡佳子（宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校指導教諭・日本新聞協会NIEアドバイザー）
新地辰朗（宮崎大学理事・副学長）
関口修司（日本新聞協会NIEコーディネーター）
髙村心花（宮崎県立宮崎西高等学校1年）
中山隆（こゆ地域づくり推進機構・教育イノベーション推進専門官）

■コーディネーター
水永正憲（NIE全国大会宮崎大会実行委員長、宮崎県NIE推進協議会会長）

17:10～17:20　次回開催地あいさつ　土居英雄（愛媛新聞社代表取締役社長）

17:20　終了～閉場

2日目　8月5日（金）

【分科会】宮崎公立大学

8:00　開場

9:00～12:30　公開授業、実践発表、共同発表

【閉会式】宮崎公立大学（講堂）

12:45～13:00　大会総括　水永正憲（NIE全国大会宮崎大会実行委員長）

閉会のあいさつ　亀井正明（日本新聞協会NIE委員会委員長）

【全国NIEアドバイザー会議】宮崎公立大学（交流センター）

14:00～16:00

公開授業・実践発表者一覧

分科会（2日目）のタイムスケジュール

※感染対策のため入室人数を制限する場合がございます。

分科会1部（9:00～10:30）

福利厚生棟 1階食堂 1階	A 小学校 公開授業	**宮崎発見隊 ～県の特産物を調べよう～** 宮崎市立生目台西小学校 【発表者】郡司美和子指導教諭	新聞記事を活用して、生産者の思いや願いに触れ、地域の特産物について関心を高めていく学習です。
101 大講義室 1階	B 中学校 実践発表	**社会の様々な事象を自分事として考え、行動する力を育成するNIE ～日々の教育活動の中での取り組みを通して～** 国富町立八代中学校 【発表者】柿木一光教諭	新聞情報ステーション設置や、立志式での決意表明と家族への一言などをまとめた内容を新聞形式にする様子を発表します。
102 大講義室 1階	C 小学校 実践発表	**心と心をつなぎ、 生きる力を蓄えるNIE** 日之影町立日之影小学校 【発表者】田崎香織教頭（日本新聞協会NIEアドバイザー）	新聞を通して、人と人、心と心がつながれば、生きる力も蓄えることができる小学校におけるNIEの在り方をご紹介します。
103 大講義室 1階	D 中学校 実践発表	**新しいものさしで考える ～新聞を通して世界を学ぶ3年間～** 宮崎第一中学校 【発表者】緒田浩輔教諭	新聞とSDGsを結びつけることで世の中に対する理解を深め、自分の世界を広げていく取り組みを報告します。
2階多目的 演習室 2階	E 高　校 公開授業	**新聞スクラップの活用 ～汎用性のある発展を目指して～** 宮崎県立宮崎大宮高等学校 【発表者】五反田聡教諭	新科目「公共」や総合的な探究の時間などで、新聞を活用する1つの展開例となることを目指します。
交流 センター	F 中学校 総合的な学習の時間 公開授業	**情報生産プロジェクト ～学校紹介新聞を創造しよう～** 宮崎大学教育学部附属中学校 【発表者】鬼塚拓教諭	「学校紹介新聞」の創造を通して「宮大附属中はいったいどのような学校だと表現できるのか」を探究します。

（敬称略）

公開授業・実践発表者一覧

分科会2部（11:00～12:30）

福利厚生棟 1階食堂 1階	G 小学校 総合的な学習の時間 公開授業	**わたしと宮崎 ～宮崎の魅力再発見～** 宮崎大学教育学部附属小学校 【発表者】荒川ひかり教諭	新聞記事を活用し、修学旅行先としての「宮崎の魅力」について様々な視点から考え、再発見していきます。
101 大講義室 1階	H 支援学校 実践発表	**日本語を身に付け、自分の意思を表現できるようになるために ～新聞を用いた実践～** 宮崎県立都城さくら聴覚支援学校 【発表者】佐藤綾、治田隆宏、田中亜紀 各教諭	聴覚支援を要する幼児児童生徒の発達段階に応じ、新聞を用いて「日本語」を学んでいる様子を発表します。
102 大講義室 1階	I 小学校 実践発表	**学力向上とNIE ～読解力向上の取り組みを通して～** 日南市立油津小学校 【発表者】福島和馬教諭	新聞コラムを活用することで、全ての教科の基礎となる読解力を向上させる取り組みを実践しました。
103 大講義室 1階	J 中学校 総合的な学習の時間 実践発表	**パブリック・ディベート 「令和の新聞購読率低下を救え! ～未成年の私たちからの提案～」** 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 【発表者】木幡佳子指導教諭（日本新聞協会NIEアドバイザー）	中高生が新聞購読率低下問題について議論します。ネット社会の中で新聞の役目はどう変わるのか!?
2階多目的 演習室 2階	K 高　校 公民（現代社会） 公開授業	**工業高校におけるNIE実践 ～AI（人工知能）と労働～** 宮崎県立宮崎工業高等学校 【発表者】渡会健広教諭	AI（人工知能）が雇用に与える影響について考え、今後自分たちに求められる能力に関して考察する学習です。
交流 センター	L 中学校 社会科 公開授業	**「身近な地域の調査」 ～国富町の将来を考える学習を通して～** 国富町立本庄中学校 【発表者】山本健太教諭	独自の「中学生新聞」で、生徒が「ふるさとの魅力」と「将来のまちづくりのアイデア」を提言する社会科授業です。
講　堂	M 大　学 新聞社 共同発表	**大学教育とNIE ～情報消費者から情報生産者へ～** 宮崎公立大学 × 宮崎日日新聞社 【発表者】四方由美教授、倉真一准教授、田中亮佑、橋本実咲と宮崎日日新聞社より2名	宮崎日日新聞社の記者が講師となる「時事問題ガイド」の実践から、大学におけるNIE教育の可能性を提案します。

〈敬称略〉

第27回ＮＩＥ全国大会･宮崎大会に参加して

大会スローガン：いまを開き 未来を拓く ＮＩＥ

（２０２２年８月４、５日・宮崎県宮崎市）

※所属・肩書は 2022 年度当時

気軽に楽しく活用を

■鳥取県ＮＩＥ推進協議会アドバイザー　岩井　克之

新型コロナウイルス感染症流行のため、実施することができなかった対面形式での全国大会が３年ぶりに開催された。感染防止対策を十分に行い、大会を開催してくださった大会関係者の方々に感謝申し上げたい。今大会では、新聞は今の学びを「社会」とつなげ、「未来」へつなげ、キャリア教育にもつながると提言された。それを実感できたのが「新聞スクラップノート作り」の実践であった。

一週間に１度、自分が興味を持った新聞記事をノートに切り出し、感想を添えて提出。コンセプトは自由に気楽に－。新聞を購読していない家庭の中には、近隣の家から一週間分の新聞を借りて取り組んだ子もいた。継続することで読解力や情報活用能力が身に付き、感想から意見・提言をノートに書く姿へとつながった。

また、友達との交流、新聞投稿などをする中で、将来の夢・キャリア教育へとつながったという。大会には、この実践を行った学校の児童・生徒が多数出席している。その多くは、新聞スクラップは楽しい、自分にとって役に立つと感じていた。

教育に新聞を活用する有用性は明らかである。また、激しく変化する社会の中、早いうちから社会参加への意識を養っていくことが求められている。しかしながら、子どもたちの身の回りから新聞はどんどん遠ざかっているように感じる。新聞を、気軽に楽しく活用してほしい。そのためにも、まず新聞がある環境をどう大人がつくっていくのかが問題であると改めて感じた。

心に残った授業風景

■南部町立会見小学校教諭　遠藤　卓

「新聞記事の要約による読解力向上の取り組み」は、具体的な方法と数値化された成果が「やってみたい」という私の意欲を駆り立てた。また、発表後の質疑・意見交流の中で、実践校の卒業生を担任する中学校教諭から、「新聞記事の要約に取り組んでいた生徒は、初見の文章を音読する力に長けている」という言葉があり、成果が持続していることが証明された。

実践が興味あるものだっただけでなく、発表の中で見た授業風景ビデオが心に残った。児童への発問、指示、声かけなど、「こんな教室なら児童は活動しやすいだろう」と思えるものだった。

「ＮＩＥは、毎日、全校で取り組むことが大切」と言われた。そのために「難しいことはしない。子どもが楽しいと感じることをする。そして、教師が共に楽しみ、負荷なくできることをする」ということを、自校職員に伝えていきたい。

大切なのは「継続」

■鳥取市立桜ケ丘中学校教諭　徳永　絵里

桜ケ丘中では現在、新聞を用いた授業や委員会の取り組みに力を入れている。この全国大会でさまざまな学校の実践を目の当たりにし、自校の取り組みのヒントになればとの思いで参加した。各校の実践に共通していたことは「継続」である。生徒も教師も無理をせず、楽しみながら取り組んでいくことが、まずは重要であるとの発表が印象に残った。

本校では昨年から、月に一回、週末に取り組む新聞スクラップ、図書委員会が企画した新聞各社の一面記事を予想するロト７に取り組んでいる。その成果として、新聞記事に興味を持つようになる生徒も増えてきた。スクラップする記事の内容やコメントも、特定のスポーツ記事だけだった生徒が、地域や社会の記事を選ぶようになるなど視野を広く目を向けたものになってきている。

全国大会で発表された実践をヒントに、生徒も教師も負担に思うことなく、楽しみながら継続できる取り組みを進めて、広い視野で物事を考えられる生徒を育てていきたい。

手に取るきっかけに

■湯梨浜学園中学校・高等学校教諭　倉恒　敬介

「ＮＩＥで大切なことは頑張らないこと」という言葉が印象的だった。負担感なく、楽しくやれるという距離感が大事。目からうろこが落ちた。新聞は一方的に押し付けられて読むものではない。もし無理に読んだ記事に興味が持てず義務感だけが残ってしまったら、次から新聞を手に取ることが苦痛になってしまう。新聞を嫌いになってしまう。

ＮＩＥとは何か？　普段新聞に触れることがない生徒たちに、自然と新聞を手に取ってもらうきっかけづくりだと思う。自ら手に取ったということは、その生徒を呼んでいる記事があるということ。それはきっとその子たちにとって必要な情報なのだ。

幸い新聞は情報の宝庫。見つからないものはない。初めは感想だったものが意見に変わり、次の問いを見つけるようになっていく。

私は生徒にそんなきっかけを与える存在になりたいし、それしかできないと考えている。

豊かな学びへと結実

■鳥取県立鳥取西高等学校教諭　中野　美紀

大会の実践発表では、生徒たちが新聞スクラップの継続によって社会への関心を深め、地域や経済に視野を広げながら、より良い社会の実現に向けて活発に提言していた。その姿に、未来を切りひらく力を確実に養うＮＩＥ教育の可能性を、大いに見いだした。

ともすれば、効率や生産性を重視する風潮の中、生徒も「この勉強は一体何の役に立つのか」という問いを発しがちだ。しかし、授業での学びを社会につなげるヒントが新聞にはあふれている。世の中の問題に、自分ならどう考え行動するのか熟考し、他者と議論を積み重ねることによって、そのまかれた種は豊かな学びへと結実するだろう。

「社会問題について話し合ううち、自分たちで新党を結成しようという話になった」という高校生の発言に、ＮＩＥ教育を通して、社会貢献に熱意を抱く生徒を育てたいという意を新たにした。

鳥取県ＮＩＥ推進協議会　会則

（目的）

第１条　鳥取県ＮＩＥ推進協議会（以下、協議会という）は、ＮＩＥ（Ｎｅｗｓｐａｐｅｒ ｉｎ Ｅｄｕｃａｔｉｏｎ）の略称にちなみ、教育界と新聞界が協力し、新聞を生きた教材として活用し、現代社会に対応した情報能力を育成する教育を進めていくことを目的とする。

（事業）

第２条　協議会は前条の目的を達成するため次の事業を実施する。

（１）ＮＩＥ実践校・実践者を日本新聞協会に推薦すること。
（２）ＮＩＥ実践校・実践者への研究補助に関すること。
（３）ＮＩＥに関する研究会を開催すること。
（４）ＮＩＥ実践・研究成果の紹介や普及に関すること。
（５）そのほか必要と認めたこと。

（構成）

第３条　協議会は次に揚げる者で構成する。

（１）学識経験者
（２）鳥取県教育委員会
（３）市町村教育委員会教育長会
（４）鳥取県小学校長会
（５）鳥取県中学校長会
（６）鳥取県高等学校長協会
（７）鳥取県私立中学高等学校長会
（８）ＮＩＥ実践指定校
（９）日本新聞協会
（１０）朝日新聞社鳥取総局
（１１）毎日新聞社鳥取支局
（１２）読売新聞社鳥取支局
（１３）産経新聞社鳥取支局
（１４）日本経済新聞社鳥取支局
（１５）中国新聞社鳥取支局
（１６）山陰中央新報社鳥取総局
（１７）新日本海新聞社
（１８）共同通信社鳥取支局
（１９）時事通信社鳥取支局

（役員）

第４条　１、協議会に次の役員を置き、総会で会員の中から互選する。

（１）会　長　　１名
（２）副会長　　若干名

（３）幹　事　　若干名
（４）監　査　　２名
２、役員の任期は事業年度の期間とする。ただし再任は妨げない。
３、役員の任務は次の通りとする。
（１）会長は協議会を代表し、会務を総括する。
（２）副会長は会長を補佐し、会長が欠けたときは副会長の１名が職務を代行する。
（３）幹事は会務を処理する。
（４）監査は会計を監査する。

（総会）
第５条　１、協議会は、事業計画そのほか運営に関する重要な事項を決定するため毎年１回定期総会を開くほか、次の場合に開催する。
（１）事業の実施状況の報告。
（２）会長が特に必要と認めたとき。
２、総会は会長が招集し、その議長となる。

（委員会）
第６条　特定事項について検討審議するため、委員会を置くことができる。

（経費）
第７条　協議会の運営に関する経費は、会員新聞社・通信社の拠出金および個人、団体などからの補助金、その他の収入を充てる。

（事務局）
第８条　協議会の事務局は新日本海新聞社内に置く。

（事業年度）
第９条　協議会の事業年度は、毎年４月１日から翌年３月３１日までとする。

（補足）
第１０条　会則の変更は総会の議決を経なければならない。この会則に定めのない事項は、会長の承認を経て委員会に諮り決める。

（付則）
１　会員新聞社・通信社の拠出金は当面、新聞社が１社年額６万円、通信社が１社年額３万円とする。

以　上

「出前授業」「ゲストティーチャー(GT)」のご案内

鳥取県ＮＩＥ推進協議会は、県内の小中高校を対象に新聞記者を講師として派遣する「出前授業」および「ゲストティーチャー（ＧＴ）」を行っています。

出前授業は、新聞を教材として「新聞の基礎知識」「新聞の読み方」「新聞編集」「新聞記者の仕事」などについて授業を行うほか、新聞記事の作成体験などを通して、児童生徒に知識や技術を伝えていきます。ＧＴでは、通常の教科の時間に記者がゲストとして訪れ、先生と一緒に授業を行います。

※内容は一部変更となる場合があります。

出前授業およびＧＴのお問い合わせ・お申し込み

鳥取県NIE推進協議会事務局（新日本海新聞社読者センター内）

電話０８５７（２１）２８７７（９：３０～１７：００、土日祝除く）

教育に新聞を
Newspaper in Education

発行2023年7月7日

鳥取県NIE推進協議会

事　務　局

〒680−8688　鳥取市富安2丁目137番地
（新日本海新聞社読者販売局販売部読者センター内）
TEL　0857(21)2877　FAX　0857(21)2891